

第39回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構・全日本中学校長会

第39回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国（海外を含む）の中学生から16,725編（学校数357校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、昨年4月に発生した熊本地震をはじめとする災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文39編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構及び全日本中学校長会等関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成29年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 水への想いが変わった日

熊本県 熊本信愛女学院中学校 一年 岡部 利穂 1

優秀賞 (八編)

《厚生労働大臣賞》 日本の水のすばらしさ

埼玉県 熊谷市立富士見中学校 二年 青木 奎晟 2

《農林水産大臣賞》 父祖の思いを受け継ぐ

鹿児島県 志布志市立有明中学校 二年 田中 恵仁 3

《経済産業大臣賞》 「水への思い」

千葉県 八千代松陰中学校 二年 小田 優海 4

《国土交通大臣賞》 水の守り人

京都府 京都市立西京高等学校附属中学校 三年 河井 紀乃 5

《環境大臣賞》 「生徒会の手で琵琶湖をよみがえらせた」

滋賀県 大津市立日吉中学校 三年 陣山 涼葉 6

《水の週間実行委員会会長賞》 水を支える二つの力

岡山県 岡山市立吉備中学校 二年 稲田 知陽 7

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 「毎日が節水週間」

香川県 高松市立龍雲中学校 二年 河渕 龍之丞 8

《全日本中学校長会会長賞》 大切な水を守る

北海道 長沼町立長沼中学校 三年 池亀 廉 9

入選 (三十編)

青森県 新郷村立野沢中学校 一年 佐藤 実真瑠

青森県 新郷村立野沢中学校 二年 岡田 香那美

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 二年 梅村 琴音

宮城県 女川町立女川中学校 三年 阿部 陽菜

宮城県 大崎市立古川西中学校 三年 福原 史乃

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 杉山 咲衣

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 三年 高橋 菜鈴

栃木県 下野市立南河内第二中学校 一年 星 優莉香

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 三年 高井 智大

東京都 東京都立桜修館中等教育学校 一年 大村 咲由良

神奈川県 カリタス女子中学校 二年 酒谷 香帆

神奈川県 洗足学園中学校 一年 板橋 彩歌

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 三年 吉崎 萌流

岐阜県 多治見西高等学校附属中学校 二年 根崎 真由

静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 土屋 ころこ

資料

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 40

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 41

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 42

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 43

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 44

第三十九回「全日本中学生水の作文コンクール」表紙式 45

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水への想いが変わった日

熊本県 熊本信愛女学院中学校 一年 岡部 利穂

水は私にとって幸せな思い出を作ってくれるのに欠かせないものでした。幼い時から大好きだった水遊び。学校のプール、江津湖での水遊び、そして一番長い時間遊んだ家でのプール遊び。早起きをして水を張り、暗くなるまで水に入ってるだけで嬉しかったです。おやつはきまってる作りのかき氷。本当に格別な味でした。幼かった私にとっての水とは、日常を彩るなくてはならないものでした。パチャッと楽しそうに水の立てる音、太陽に照らされてキラキラした水の顔、今も鮮明に残っている水の記憶です。

しかし、私にたくさんのおいしい時間をくれた水への想いが、一年前に起きた熊本地震で大きく変わりました。昨日まで当たり前に使っていた水が、じゃ口をひねっても一滴もでないのです。飲み水もなく、食事も作れずお風呂にも入れずトイレも流せません。余震が続く中、経験したことがない水のない不自由さを感じ、怖くて辛い毎日でした。

街中のコンビニや自動販売機に水がないので、私は給水車に父と並びました。長い行列を待ち、やっともらえた水を次はマンション十二階まで、階段で運ばなくてはなりません。10Lの水をヘトヘトになりながら運んでも、トイレや飲み水等に使うと、すぐになくなります。数日間水を確保するためにこれを繰り返して、何度か涙がでそうになりました。

しかし今振り返ると、今まで水について考えなすぎた自分に気づき、水の大切さに身を持って感じた貴重な時間でした。

ある時、家に保管されていた市の上下水道便りが目にとまりました。それは熊本地震より前に配布されたもので、上下水道局は災害に備え、上下水道の機能を確保できるように耐震化等の災害対策に取り組んでいることを紹介した内容でした。例えば地震時に水道管が折れないよう曲がる水道管の整備をしたり、水を貯めるタンクをコンクリートで造ったり、下水道を強くするために接続の工夫をしたり、様々な対策を進めていた

のです。また災害対策用の貯水施設や応急給水の準備もすすめ、熊本市民七十四万人の一週間分の水道水の確保を目標にしていました。また、災害を想定した訓練も下水道局の方々は行っていたそうです。私は、この様な施設があることも訓練も知らず、本当に自分が恥ずかしくなりました。

よく考えると水がなければ生きていけないということは古代から現代まで同じなのです。災害がおきなくても酷暑や雨不足でおきる水不足問題、水源地の環境問題、日々身近な問題は新聞やニュースで伝えられてきたはずです。今までの私はなんて無知で無関心だったのだろうと反省をしました。

地震から一年、復旧復興など地震関連のニュースや情報が伝えられ、それぞれが地震前の生活に戻ろうと努力をしています。私の家でも水道が復旧してから家族で話し合い、節水と水の備えを始めました。飲み水、洗顔、歯磨き、入浴、トイレでの水の使いすぎに気をつけ、ながら使いをしない、水タンクの備蓄とお風呂の残り湯はためるようにし、個々でやれることを今も続けています。

震災後の私は、水への想いが確実に変わりました。幼い時の水にまつわる良い思い出は前よりもっと大切に思え、日常生活では、水なしでは作れないお米がとても大事に思え、生産者の人、運搬する人、売る人、関わったみんなに感謝を伝えたい気持ちになりました。

じゃ口からでる水は小さい時に見ていた水の顔より今のほうがずっと輝いてみえます。

水のない暮らしの大変さを経験した私だからこそ、わかることがあり、この先できることがたくさんあると思います。暮らしの中で水を大切に想い、そしてこの気持ちを今後も持ち続け、たくさんの人につないでいかなければいけないと、今心に強く思っています。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

日本の水のすばらしさ

埼玉県 熊谷市立富士見中学校 二年 青木 奎晟

埼玉県熊谷市。日本一暑い街としても知られており、町の中には、荒川が流れており、いくつもの用水路がある水と関わり深い街である。蛇口をひねれば、あたり前のように水が出てきて、私たちは、生活用水として、飲んだり、洗ったりと利用している。

ぼくが、初めて見た水の風景は、日本ではない。飛行機の中から見る、どこまでも茶色の大きな川だ。それは、中国大陸全土につながっている、中国の生命線だ。日本の生活用水とは、違っているのは明らかだ。

その一つに、生水では、飲めないということである。飲料水は、購入するか、沸かし湯といて、一度煮沸して冷ましてから飲む。そのため、ぼくは、日本に帰国した時に、先生から、のどがかわいたら、水道で水を飲んでくるように言われても、どうしても、蛇口から水を飲むことができなかった。どうしてみんなは、直接水が飲めるのだろうか、不思議で仕方がなかった。先生からも、心配されたが、ぼくにとっては、生水を飲んでいるみんなのほうが心配だった。日本の水のすばらしさに、まだこの時は、気が付いていなかった。

そしてもう一つは、お風呂事情である。中国では、湯ぶねにお湯を張って入浴するという生活習慣がない。お湯を張ると、水が茶色く変色しているからである。白い洗濯物は、何度か洗っているうちに茶色く染まってしまう。洗濯しているのに、茶色くなっていくというのが、中国に限らず海外の水事情の定番である。その中で、あたり前のように暮らしてきた、ぼくには、日本で湯ぶねにお湯を張っても、濁らないお風呂や、何度洗っても変色しないTシャツは、とても驚いた。

日本は、水源が豊かな国としても知られており、中国のお店でも、日本のミネラルウォーターは、とても高く売られていた。そんな、水源の豊かな日本でも、水の猛威に襲われた忘れられない出来事があった。中国でも見たことのない、茶色の、濁流が何メートルもの高さで、街に

覆い被さる風景は、水の恐ろしさを映し出していた。そして、生きるために大切な水は、あつという間に私たちの生活を変えてしまったのである。そんな恐ろしい水も、原発の事故では、火消しのために、大量の水をし、事態を沈静化させたのも、水源の豊かな日本の技でもあったのは、事実である。

人間と水の関係は、時に災害をもたらす事もあるが、人間は、水の中で誕生した生命を受け継いでいる生物の一つである。人間の体は、ほとんど水でできているといっても、過言ではない。体内から、水がなくなってしまうえば、それは、死をも意味することとなる。つまり、私たちは、水なしでは、生きてはいけないということなのだ。人間は、水によって生かされている。日本は、水資源が豊かであるがゆえに、「蛇口をひねると水がでる。」のがあたり前となっているのが、水道普及率九十七・三パーセントという高い数字からもよくわかる。しかし、暮らした水のほとんどを水道水に依存している日本にも、水がなくなった時の生活は、どのようななるだろうか考える時が近い将来くるかもしれない。事実は地球温暖化により、降水量は、年々減少傾向にあり、毎年のように、各地で水不足もおこっている。一九六四年のオリンピックの際には、水の使えずで、一時、水が出にくくなるということもあったと聞いている。二〇二〇年のオリンピックでは、世界中の人々が、日本の蛇口をひねる。そして、限りなく透明な日本の水に気が付くことだろう。だからこそ、生活をしている私たちが、水のあり方や使い方を見直していかなければならないのである。そして、ぼく自身も、あの時の、蛇口をひねれば直杯水が飲めるという、衝撃的な気持ちを忘れずに、水と共存していこうと思っている。

農林水産大臣賞（優秀賞）

父祖の思いを受け継ぐ

鹿児島県 志布志市立有明中学校 二年 田中 恵仁

美しい自然が広がるこの地、有明。春、張り巡らされた用水路を伝って水が大地を潤していく。秋には黄金色の実りが頭を垂れる。

私の将来の夢は、おいしくて安心・安全な米を食卓に届けることで、多くの人を笑顔にする稲作農家になることだ。私の祖父母は米を作っている。私は小さなときから自然が好きだった。特に、水を使い、汗水を流して作業する祖父母の姿がかっこよくて仕方がなかったのだと思う。どんなに疲れていても、どんなに天気が悪くても二人は辛そうな顔一つせず作業をしていた。私たちに美味しいお米を食べさせようと、苦勞を見せないでいたのだろう。

小学校の時に田んぼづくりから米ができるまでの学習をした。その時、田植えでどろんこになったり、夏の暑い日に水の管理に学校に行ったり、台風で稲が倒れないか心配したり、どれくらい収穫できるか楽しみだったり田植えから四か月半程の間、一喜一憂する毎日だった。私たちが作った田んぼは、祖父の田んぼの広さよりはるかに小さいのに、これだけのいろいろな気持ちになったことを考えると、祖父はどんな思いなのだろう。

農業は自然を相手にする仕事、大変だ。特に水がなければ作物は育たない。私の住んでいる有明町の歴史はまさに水との闘いの歴史と言っている。それは、私の通っている有明中学校の校歌にも表れている。

「父祖の拓きし 野井倉の 豊かなみのり たゆみなき 進取の気象 受け継ぎて 郷土の栄 築きゆく」

私はこの歌詞を読んで、これは郷土の先人たちが、この有明の地を開田したことについて書いた詞だと分かった。歌詞の意味をかみしめながら歌うたびに、私の心を優しく包み込むと同時に、ちっぽけな自分の存在を郷土の先人に励まされるのである。

有明の野井倉は川から五十メートルの高さに広がる台地である。用水

路が作られる前の野井倉は、畑として利用されているほかは一面にススキが生える荒地だった。畑では、陸稲、粟、ソバ、サツマイモなどが栽培されていた。水は谷底の川から運んだり、深い井戸を掘り、牛や馬を使って苦勞して汲み上げたりしていた。人々は農業ができない冬の間、荒れ地をスキヤクワで切り崩して細々と小さな田を開いていたという。その時、立ち上がったのが二十一歳の野井倉甚兵衛である。しかし、開田の苦勞は並大抵のことではない。莫大な費用の工面、難工事の技術、戦争…。途中何度となく計画は挫折しそうになる。

水は台地から約十三キロ離れた川の上流から引かねばならない。溝を掘り、三十四ものトンネルを掘る作業である。現代のような重機のない時代、人間の手作業で進めていく。ツルハシで岩に向かっている写真が今も残っている。

様々な困難の末、ようやく完成したのは、彼が七十八歳の時のことである。約六十年もの間、生涯をかけて野井倉に水を引くこと一筋に生きてきたのだ。

とうとうと流れる用水路の水と一面に広がる田んぼ。今では当たり前風景だが、以前は違う。この人々は、水の大切さを身を以て知っている。そしてそれを次代に伝えようとしている。

祖父母の手伝いをしている時、祖父は米作りのことや将来のことなどを語ってくれる。祖父母は年々老いていく。今は苦勞して作っている米を今度は私が作って、二人には樂をさせてやりたい。

季節がめぐってまた、用水路に水が流れ、野井倉台地は一面の水田に姿を変えた。私も、郷土の先人や祖父母たちの思いを受け継ぎ、水の豊かなこの土地で自分の人生を開拓していきたい。

経済産業大臣賞（優秀賞）

「水への思い」

「水に感謝して大切にしなければいけない。」

私が幼少の頃から、祖父に教えられてきた言葉です。

私の祖父は、およそ四十年、水処理の仕事にたずさわってきました。セールス・エンジニアとして働き、いろいろな工場などの現場に向き様々な水処理、水質管理の仕事をしてきました。祖父から聞いた体験談は、とても興味深く「水」の奥深さを感じます。

「水」は、いろいろな場所や工場に使用されます。時に製造用水として食品や飲料、また医薬品などに使用されていて、私の想像以上の大量の水が消費されてきました。半導体工場などで使用される洗浄用水もあります。これらの用水は、厳重な水質管理が必要です。祖父はよく、「現場で上手くいかない時もある、徹夜で作業したこともあったけど、振り返ると楽しい経験だった。」

と、笑顔で話していました。私は、そんな祖父が誇らしく見えました。私は、全てと言っている程に、製造には水が不可欠で必要だと思えます。そして、その業態に合わせ、それぞれの用水が必要な事。スーパーに並んでいる商品を安心して口にできるのは、徹底した衛生や品質管理そして、きちんと安全に処理された製造用水のおかげだと思います。また日本は、製造業が盛んな国。そこでも製造用水が重要なのです。何より、世界に誇れる半導体技術にも洗浄用水が重要な役割をしています。きちんと厳重な水質管理をする事ができる水処理技術のおかげでもあると言っているのではないのでしょうか。

日本の水は安心とよく耳にします。それは、日本の水の処理、浄水技術のクオリティが高いからだと思えます。きっと祖父の世代の人達が、それぞれの技術を確立していき日本の産業を盛んにしたのだと思えます。そして祖父は言います。

「水は、限りのある資源。日本の気候や地形、何より天からの恵みの雨。」

千葉県 八千代松陰中学校 二年 小田 優海

それに感謝しなければいけない。」

水の事にたずさわると、水を大切に思う祖父の心からの言葉だとわかります。世界では、雨が降らず水不足で危機的状況にある国、水の処理や浄水技術がまだ発展せず衛生問題を抱えている国があり、日本の企業なども応援しているようですが、まだまだの現状です。

日本は、とても恵まれた国です。生きていく上で欠かせない水。その「水」が、常に安全で安心して口にすることができているのですから。確かに祖父の言うように、日本の気候や地形、天からの恵みの雨にももちろん感謝していますが、安全で安心な水にするために、たくさんの方々の技術を持って働いている人達、その人達の思いによって安心かつ衛生的に過ごすことができている人達。水にたずさわると、皆さんの思いを考えると、「大切な水」。決して水をムダに使うことなどできないのです。

私達が豊かに生活できるのは、日本が水に恵まれ、水の処理技術により、衛生的な国だからです。そして厳重な水質管理によって、日本の産業も発展しました。今の時代を築いてくれた祖父の世代の人たちにも感謝をしたいと思います。これから、私達も地球や自然に優しい e c o 生活をし、限りある資源と常に意識し、受け継いだ安全を大切に向上していくよう努めなければならないと思えます。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水の守り人

京都府 京都市立西京高等学校附属中学校 三年 河井 紀乃

ミンミンミン。蝉の大合唱が聞こえる。ブォー。船の周りで澄んだきれいな水が跳ねている。キラキラと八月の陽を受けて輝く、周りを森で囲まれたダム湖の上を私は船に乗って進んでいた。淀川ダム統合管理事務所と天ヶ瀬ダムを見学させていただいた時、私は「水の守り人達」と出会ったのだった。

「天ヶ瀬ダムは、洪水を防ぐ、水道水の供給、発電という三つの役割を持つた多目的ダムなのです。」

ウーン。水面に出ているバリケードのようなものが船の行く手をあけた。何のためのものなのだろう？私は周りを見渡した。あつ、

「あんなに大きな家具が流れてくるのですか。」

「そうなんです。ゴミが放水口の方まで流れると故障の原因になるので、手前のバリケードでゴミをとめ、取り除くんですよ。」

確かにきれいだと思っていた湖の、バリケードの向こうにペットボトルやビニール袋のごみが頼りなく浮いている。ゴミを投棄した人は、それが流れ着いてダムを壊しかねないことをこれっぽっちも意識していないだろう。

「うわあー。放水口の下に立つと、とても迫力があるんですね。」

続いて私はダムの表側の壁に沿って続く通路を歩かせてもらった。がくがく、足が震える。思っていたよりもはるかに高い。壁の向こうにはあの巨大なダム湖があるのだからなおさら怖い。大きな大きな砦だ。ふと下をよく見るとため池のようなものがある。

「あれは放水時の段波を下流に伝えないための工夫ですよ。それでも放水時は危険なので下流に注意を促すようにしています。」

そういえば、先に見学した淀川ダム統合管理室は巨大スクリーンで全ての川を監視し、雨量など様々なデータをもとに、洪水の危険性を考えた放水量を決めたりする人々がいる緊張感漂う部屋だった。見学した全

てが人を守るという安全第一のもとに動いていた。

人間は大昔から水と時に戦い、時に上手く付き合いつながらその恩恵を享受してきた。その長い歴史を経て最前線で水に携わる「水の守り人」が生まれた。所長さんから、洪水が起るたびにダムがその被害を拡大させたという意見が多く上がると聞いた。人は自然の営みを止めることはできないので、人が作ったものや最前線で働く人に不満を持つてしまふ。逆に、豪雨の後洪水が起きなかつたら、私達は水の守り人の存在に気が付きさえしない。私は管理事務所長さんからひしひしと伝わってきた水にかける思いの強さや、職員さんのプロとしての仕事に対しての姿勢から、当たり前だと思っていた水の向こう側を初めて実感した。そして水の守り人に迷惑をかけないようにしたいと思った。しかし私にいったい何ができるのだろうか。

「やっぱり自然と人間を一度に相手にすると判断することが難しいと気がたくさんあるんです。そういうことも含め皆さんにこの仕事について知ってほしいですね。」

この姿を知ったからこそ私達が水の守り人をそう簡単に手伝ったり、ましてや批判することはできないと思った。

天ヶ瀬ダムでは、地域住民と「協働事業」を行っていると聞いた。これは水に関する知識を住民に提供しそれを住民がさらに広めるというものらしい。これなら私でも力になれるのではないか。水の守り人の仕事を多くの人を知り、自分達はその最前線で水と戦ってくれている人の後ろにいると意識することで、自然と水の守り人が仕事をしやすい環境をつくれるのではないか。環境保全のために「水を汚さないようにしよう」「水を大切にしよう」ということを広める活動はたくさんあるが、私はそれに加えて、水が「水の守り人」の手を通して流れていることも広めたいと思っている。

環境大臣賞（優秀賞）

「生徒会の手で琵琶湖をよみがえらせたい」

「うわっ、汚い！」

生徒会の活動で「下阪本クリーン大作戦」という清掃活動を行っていたときに、つい口走ってしまった一言である。私が清掃を担当していたのは下阪本にある琵琶湖沿いの公園。一見自然豊かできれいな公園に見えるが、実際に掃除をしてみると、そのごみの量に驚いた。道のはしに落ちているお菓子の袋やたばこの吸い殻、琵琶湖の中に浮いている空き缶の数々。まさか、ここまで汚れていたとは思わず、ショックを受けた。しかも、落ちているごみはすべて人間の手で捨てられたものであり、人が自然を壊している、という事実を思い知らされた。

また、私は小学校五年生のとき、うみのこという船で一泊二日のびわこ環境学習をした。その学習のなかで、琵琶湖の北湖と南湖の水質の違いを調査する、というプログラムがあった。実際に、水を透明の容器に入れて見比べてみると、違いは一目瞭然。南湖の方が目で見ても分かるくらい濁っていて、水質が悪かった。うみのこの職員さんに、南湖の水が汚れている原因を聞いてみた。南湖周辺の方は人口密度が高く、ごみを捨てられることが多く水質が汚濁されやすい、ということなのだそうだ。私に住んでいる地域は南湖のあたりである。自分がつい捨ててしまったごみがあるまま琵琶湖の水質汚濁につながるのかと思うと、ぞっとした。だからこそ、もっと自分の行動に責任をもてるような人になろうと思った。

私がこの二つの体験を通して感じたことは、水は、人間の手によって悪いものにも良いものにもなってしまう、ということである。琵琶湖の水が汚濁されれば、その臭いで付近に住む人たちが生活しづらくなってしまうったり、魚や鳥などの生き物が生きていけなくなってしまうたりと、さまざまな環境問題が起こる危険性がある。また、琵琶湖は周りの府県の水源にもなっているため、そうした地域の人々にも影響が及ぶ。

滋賀県 大津市立日吉中学校 三年 陣山 涼葉

だがその一方で、水は人類を発展させる鍵にもなる。昔から、大河の流域にはさまざまな文明が繁栄してきたように、水のあるところには多くの文化が栄えるのである。つまり、美しい水を持つということで、より豊かな生活へと発展させることができるのではないか。

そんな可能性豊かな「水」というすばらしい資源を、どう活用していくかは私たち人間次第なのである。だから私は、こまめに水道の蛇口を閉めて節水する、汚れたものをそのまま洗わず拭き取ってから流す、などということをや心がけて、有限である水を大切に使うように思う。昔の人たちが残してくれたこの美しい水を、琵琶湖を後世へと受け継いでいくために私たちができることは、一人ひとりが水に対する意識をもち、行動に責任をもつことだと思う。

私は生徒会として坂本ふるさと大掃除や、雄琴ヨシ刈りなどという地域行事に参加してきた。ヨシ刈りをする事によって、水をきれいにしてくれるヨシが翌年も立派に生えてくるそう。そうした地域活動に参加することが、自分達が住む町を美しくする一歩なのだと思うと、もっと頑張ろうと思えてくる。

日吉中学校を取り巻く日吉学区が美しくなれば、それは琵琶湖の美化にも繋がり、琵琶湖周辺の命のサイクルの改善にも繋がる。私たちが行う美化運動は小さな一歩かもしれないが、それが琵琶湖の環境を良くするんだと信じて、これからも頑張っていきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水を支える二つの力

「お小遣いを貯めて買いたいもの。」といえは、何が思い浮かぶだろうか。はよりの洋服、お気に入り文房具。どれもすてきだが、私が今欲しいものは「雨水タンク」である。

私が雨水タンクに注目するようになったのには理由がある。それは、私達の生活になくはならないものである。「水」が、二つの力によって支えられ、私達の元に届けられていることに気づいたからである。

一つ目の力は、いわばハード面の支えだ。システムとして私達に水を届けてくれる「水道」である。私達の体は約六十パーセントが水できている。だから、私達にきれいで新鮮な水を運んできてくれる水道は、文字通り命綱のような存在だ。世界では、まだまだ水を手に入れるのに、私達には想像もつかないほどの労力を必要とする地域もある。それに引きかえ、日本では蛇口をひねるだけで、飲める水が手に入る。信じられないほど恵まれた環境である。水道料金に対し、「高い」と感じる人もいないかもしれない。だが、私はこのすぐれたシステムの対価としては驚くほど安いと思う。憧れる外国人が多いというのも、とてもよく分かる。

しかし、この水道も初めから私達の生活の中にあつたわけではない。私の住んでいる岡山市に水道が誕生したのは、明治三十八年七月だった。なんと全国で八番目の早さだったそうだ。市の中心街にある京橋に沿って架けられた「水管橋」は、登録有形文化財として、現存する全国で唯一の水道管専用橋として私達を毎日見守ってくれている。昔も今も、私達の生活における水の恵みの大きさを京橋を通るたびに実感する。

先日、久しぶりに浄水場に併設された「岡山市水道記念館」を訪れた。特に興味深かったのは、「緑のダム」として、降った雨水の五十パーセントを蓄える森林を水道局の職員が管理しているということだ。まさに源から水の面倒を見てくれていると知り、感激した。

水を支える二つ目の力は、ソフト面、つまり公的機関ではなく、私達

岡山県 岡山市立吉備中学校 二年 稲田 知陽

一人一人の努力である。大切な水をどのように受け取り、使い、自然の元へ返すか。その姿勢を見直したい。

私の父方の祖父は、赤磐市で農業をしている。自然豊かな山の中で、私もタケノコを採ったり、ワラビを摘んだり、町ではできない体験をさせてもらっている。その祖父の農業を支えるのが、地元の池だ。「上の池」と呼ばれる大きな溜め池の守りを、集落で協力して行っている。先日、遊びに行ったとき、ちょうど、祖父は溝掃除をしていた。田植えまでに、池から用水路を通って水が田に流れ込めるように、草を刈ったり土を上げたりしなければならぬそうだ。早朝から昼過ぎまで休みなく働く祖父の姿を見て、私は改めて、当たり前のように水を使うのではなく、自分から動いて、水と関わっていくことの大切さを感じた。

ならば、私には何が出来るだろうか。私は、水の無駄使いを減らすことが第一歩と考えた。水道記念館で学習したが、一日の生活の中で最もたくさん水を使うのは、トイレだそうだ。恥ずかしいからといって、トイレの水を使い過ぎるのは、私達の自意識過剰かもしれない。本当のマナーとは何かを仲間と話し合ってみよう。

そう思っていた矢先、新聞記事で、岡山市が雨水タンクの助成金制度を設立したことを知った。雨水タンクは、主に洪水の抑止のために設置されるらしいが、庭の水やりや災害時の代替水源としても活用できるし、トイレの流し水にも使える。雨水を自然に土にしみ込ませることで、地下水の量も増やすことができる。まさに、自然から水を受け取り、自然に返すやり方が実現できるのだ。

水を支える力に私はなりたい。そのためにも、自分で雨水タンクを購入入りたいと思う。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「毎日が節水週間」

香川県 高松市立龍雲中学校 二年 河渕 龍之丞

「お兄ちゃん、地球に存在する水が一リットルのペットボトルだとしたら、汚染されていない水はどのくらいだと思う？」水の学習をしてきた妹がそう聞いてきた。どのくらいだろう。コップ一杯くらいだろうか。「はずれ！つま楊枝の先つちよくらいなんやでー。」勝ち誇ったように言う。一リットルのうち、真水はフィルムケース一杯、人間が使える水はそのキャップのへこみ分なのだという。その水を僕達は大切に使えているのだろうか。

僕が住む香川県は、年間を通して降水量が少なく、大きな河川がない。そのため、はるか昔からたくさんのため池が造られ生活を支えてきた。日本一の満濃池は有名だが、僕の家のみわりにも平地を始め、三郎池や前池など至る所に大小のため池があり、農業用水として田畑を潤している。また豪雨など流出水の一時貯留池として、河川の氾濫を防いだり砂防せき堤の役割を果たすなど、現在も大きな役割を担っていることがわかった。

昭和四十九年に完成した、高知県の早明浦ダムは「四国のみずがめ」と呼ばれている。ダムの完成により吉野川の水は池田ダムを経由して香川用水に流れ込み、香川県民は安心して水を使えるようになった。と同時に早明浦ダムの濁水は香川の濁水にも繋がる。

平成六年に起きた大濁水は、香川県全土に被害をもたらした。早明浦ダムの利水率が0%を切りダムに沈んだ旧役場の殆どが姿を現わし、大きく報道されたそう。調べてみると、香川県では延べ百三十九日間も制限給水が行われていた。夜間は断水になり昼間は五時間しか給水されない。工場は停止し、喫茶店からおしぼりが消え、会社のトイレにはくみ置きバケツが現れた。当時、高松市内で働いていた母の友人も、仕事を終え帰宅しても水が出ず大変困ったそう。

節水の大切さを実感している香川県民だが、実はひとり当たりの一日

の水使用量は、全国平均より多いそう。また二十年前と比べると、生活様式の変化に伴い一日の使用料は二倍近く増えているそう。「うどん県」がゆえの理由もあるだろう。しかし、僕達ひとりひとりが出来ることがあるのではないだろうか。そこでパソコンを使って調べてみた。こまめに蛇口を閉める、食器の溜め洗い、お風呂の残り湯や料理のゆで汁の再利用などどれもすぐに出来そうだと思う。止水栓を調整する自主減圧では、一日に五十〜二百リットルもの節水が可能だそう。

また高松市としても新たな水資源の確保として、雑用水の利用や、下水処理場で再生された再生水の利用などが行われている。公共のトイレなどの「再生水利用」の貼り紙もよく目にするようになったと思う。

僕は断水を経験したことがない。水道のレバーを上げれば水が出るのが当たり前。水が出ないなど想像ができない。しかし、世界には水道すらなく汚れた水を飲み、感染症で亡くなる子供達もたくさんいるという。誰もが安心して飲み水を利用できるように、全世界に上下水道が整備される日が一日も早く来てほしい。全ての人が安全な水を適切に使用し、排出され、再生された水が再び海に戻っていく。未来の僕達の為にも、大切な限りある水を残していかなければならないと僕は思った。

「お兄ちゃん、節水週間に協力してねー。」宿題の節水プリントを見せながら妹が言った。僕は部活後のシャワーをこまめに止めて使用した。母は洗たくをなるべくひとまとめにして洗ったそう。妹はトイレに続けて行こうと提案してきた。今日、平成二十六年以来の第一次取水制限が始まった。たとえわずかだとしても、水を大切に作る気持ちを忘れずに「毎日が節水週間」で頑張っていこうと思う。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

大切な水を守る

水は無限にあるものではないということを、身をもって私に教えてくれたのは、祖父だった。羊蹄山の麓の雄大な自然の中で、自らの力で家を建て、遠く離れた場所から汲んできた水を、とても大切に使いながら静かな時間を過ごしていた祖父。その祖父の姿から、水を無駄遣いしていた自分に気づき、私もいつのまにか水を大切に使うようになった。

しかし、祖父が教えてくれた「水を大切にすることには、もっと深い意味がこめられていたことに、最近気がついた。

去年、私は、夕張市にあるシューパロダムを見学させていただいた。シューパロダムは、日本で第二位の湛水面積をもち、洪水を防ぐ治水や、発電や上水道に利用する利水の役割を果たす重要なダムだ。見学に行く前は、ダムと言えば、水を貯める場所だというくらいにしか考えていなかった。モーターボートに乗り、仕事に同行させていただいた。まず驚いたのは、湖内の点検作業だった。しかも、その点検項目は五十ほどもある。地図と照らし合わせながら広大な湖を回っていく。流木や投棄物、崩落の有無や侵入者など、一つ一つしっかり点検を行う。とても時間がかかる大変な仕事だ。他にも、川への放水の管理、堤体内巡視など、私が見学した短い時間の中で、数多くの仕事を行っていた。しかも、一年中、毎日これらの仕事を続けているのだ。人の手によって貴重な水が管理され、私たちにその水が提供されているという現実を初めて目の当たりにすることができた。

湖を巡視しているとき、ふと、以前母から聞いた話を思い出した。それは、母の知人の子どもの時代の話だ。電気や水道はないため、洗濯は川でするのが、泥炭地帯の黒い水なので、白い服は黒くなってしまふ。また、飲み水も井戸から汲むのだが、そのままでは飲み水には適さず、一度大きな瓶に入れ、ミョウバンを入れて殺菌・消毒してから使う。この話は、わずか五十年ほど前の話だ。つまり少し前までは、これほど水

北海道 長沼町立長沼中学校 三年 池亀 廉

に苦労する生活があったのだ。きつと祖父も、水を手に入れるのに、同様の苦労をしていたに違いない。

私たちは、今充実した水環境の元で暮らしている。蛇口をひねれば、いくらでも綺麗な水を手に入れることができる。しかし、それは、当たり前なことではなかった。水を管理する人たちが存在し、苦労を重ねながら設備を整え、毎日水の管理を続けてくれておかげなのだ。その一翼を担っているのが、今一緒にボートに乗っている方々だったのだ。

これまで、祖父の姿から、水が大切なのはわかっていたつもりだったが、それは一面を理解したに過ぎなかった。今回、ダムで働く方々を間近に見て、祖父が思う本当の水の大切さがやっとわかったような気がする。祖父は、苦労して水を手に入れ、大切に管理しながら水と共に生活していた。つまり、水とは、人が苦労を重ねて手に入れられる貴重なものであること。だからこそ、自分たちの手で水を管理し守っていかねければならないこと。これが、祖父が本当に伝えたかったことなのではないだろうか。だから、水に対して無関心や無責任な態度ではなく、自分の手でしっかりと水を守っていかねければならない。それが「水を大切にすることなのだ。

祖父に詳しく話を聞いてみたかったが、残念ながら祖父は、今年の冬、亡くなってしまった。私は、祖父の思いを受け継ぎ、私も水を守る一人として、これまで以上に節水や水を汚さないことに取り組む決意をした。水は多くの人の手で守られている。そこに、私たち一人ひとりも関わっていかねければならない。これからも、多くの苦労の末にやっと手に入る水に感謝し、水を大切にすることを送っていききたい。目の前にあるコップ一杯のきれいな水を、いつまでもみんなの手で守っていくのだ。

入選

みんなに愛される水

青森県 新郷村立野沢中学校 一年 佐藤 実真瑠

数年前の五月のことでした。その日は天気がよく、さわやかな青空が広がっていました。祖父にしいたけの植菌作業の手伝いを頼まれていた私は、朝早くでかけました。

「風が、気持ちいいべえ。」

と祖父が言いました。少しねぼけ気味だった私は、気持ちよく吹く山風に目を覚ましてもらいました。

「ごさ、植菌したほだ木、持ってくるんだ。」

そう祖父に言われたその場所は、湧き水が流れ、山菜がたくさん育っているところでした。その光景は、「うわあ。」と声が出てしまうほどきれいでした。

「この湧き水は、何に使うの？」

私は祖父に尋ねました。

「農作業に使うために貯めてる、大事な水だ。」

「大事な水」という祖父の言葉に、私は次々と疑問が湧き上がってきました。「どうしてここに湧き水が流れるの?」、「農作業以外にこの湧き水は何に使うの?」などという私の小さな質問に、祖父は一つ一つ丁寧に答えてくれました。私は祖父といろいろな話をしながら、楽しく手伝いをすることができました。

祖父は以前、田んぼ仕事の帰りに、サワガニを捕ってきてくれたことがあります。私はそれまでサワガニという生き物を見たことがありませんでした。サワガニはとてもきれいな水が流れている所にしか生息していないそうです。しいたけのほだ木を運んだ場所の湧き水を見た時にも思いましたが、私の住んでいる地域の水は本当にきれいなあと改めて感じました。

私の自宅のすぐ前には井戸があります。その井戸は祖父が子どもの頃からあったそうなので、古い井戸だということはまちがいありませんが、今でもきれいに使われています。井戸は大、中、小と三段に分かれていて、一番大きな所には湧き水が流れ込んでいます。夏になると、地域の人たちはそこに

スイカや山菜を浮かべて冷やしておきます。スイカにはガムテープを貼ってマジックで名前を書いておきます。祖父の名前は「昭雄」というのですが、あきおスイカがプカプカ浮かんでいるのを見るのはとても愉快です。

中段の水は車を洗うのに使ったり、打ち水をしたりするのに使います。とても暑い日には友だちと集まって道路に水をまきます。それだけで涼しくなったような気分になります。

一番下の段の水は、長ぐつを洗ったり水遊びをしたりするのに使います。みんなが自然にこの井戸の周りに集まってきて、それぞれに湧き水を利用します。私は小さい頃からこの水を飲み、打ち水をし、水遊びを楽しんできました。井戸にはいろいろとお世話になっているのです。

幼い頃、井戸の近くにツバキの花がきれいに咲いているのを見て、友だちと一緒にその花びらを井戸の水に浮かべて遊んだことがあります。時々自主的に井戸のそうじをしていた祖父がそれを見つけて、すごく怒りました。あまりの見暮に、自分がやったと言いつつ出せなくなりました。「誰がやったかわからない」とウソをついてしまったのに、それでもものすごくしかられてしまいました。もし私がやったと言っていたら、さらにひどく怒られたらどうと思います。それほどこの井戸は祖父や地域の人たちに大切にされ、愛されているのです。ツバキの花の思い出は、ちょっと苦い思い出ですが、私は、大人になってもこの井戸を守りたい、いえ、守っていかなければならないと思っています。

私たちの生活に欠かせない水。水が豊富にあり、いつでも利用できる幸せを失わないように、地域を流れる湧き水を大切にしたいと思います。先人たちが残してくれた「水」という資源を、今度は私たちが受け継いでいく番です。

入選

山の恵み

青森県 新郷村立野沢中学校 二年 岡田 香那美

田んぼの水は泥と混ざって少し茶色くなっていたが、透き通っていて、太陽の光が差し込んでキラキラと輝いていた。用水路から田んぼに流れ込んでいる所の水もとてもきれいで、よく見ると、カエルやアメンボ、イモリたちが気持ちよさそうに泳いでいた。

この田んぼでできた米はとてもおいしい。こんなにおいしいお米を食べられるのは、米づくりをがんばってくれている父のおかげでもあるが、目の前を流れる浅水川から引いてきているきれいな水のおかげであると、私は成長とともに思うようになった。

私は、小学校低学年のころの夏休みには、田んぼの世話をする父にくっついていき、毎日のように近くの浅水川で遊んでいた。

「しゃつこいっ。」
そうさけびながら少しだけ足を突っ込んでみたり、流れていく砂や小石を眺めたり、ドジョウの様子を観察したりしていた。

「ねえねえ、この水、どっからきているの？」
ふと気になって、父に尋ねてみた。

「ずっとあっちの方の山からきている。」

と西の方角を指しながら父が言った。幼かった私には、あっちの方がどういう所なのか山が多すぎてよく分からなかったけれど、そのときの父の言葉はなんとなくずっと覚えていた。

小学五年生のときに、私と父と姉と弟の四人で山に入った。

「家の水道の水が出ているところ、見に行ってみないか。」

と父に誘われたのだ。私は中間地点のような場所は知っていたけれど、水が湧き出ている所は見たことがなかった。行ったことのない道に入って進んでいくと、だんだんと道もなくなってきた。さらに、生い茂る笹の葉をかき分けながら進んでいった。日差しが強く、気温も高い日だったので、汗をたくさんかいたし、のどもとても渴いていた。

どのくらい歩いたのか分からなくなってきたとき、

「この上だよ。」

と、斜面の上の方を指差しながら父が言った。細いひと筋の水が緩く蛇行しながら流れていた。その斜面を登っていくと、こんこんと水が湧き出ているところがあつた。

「飲んでいいの？」

と父に聞くと、

「飲んでいいよ。」

と言ったので、手にすくってごくりと一口飲んでみた。山の水はすぐく冷たくて渴いていたのどにしみわたつた。私はさらに手にすくってごくりとごくりと飲んでみた。疲れが一気にとれていった。家で飲んでいる水より甘く感じられて、とてもおいしかった。

「この水が我が家の水道まで来てるんだよ。」

と父が言った。私は、これが山の恵みということなんだと思った。そして、こんな草木と土だらけの山の中に湧き出ている透き通った水を、とてもきれいだと思つた。

以前東京の親せきを訪ねたとき、水を飲んで「おいしくないなあ」と感じたことがある。薬のような苦いようなそんな味がした。田舎で飲んでいる水とは全然違う味だった。都会の人たちが水についてネットに書きこんでいるのを見たことがある。いろんな人が「なまぐさい」とか「苦い」と言っていた。それを見て私は、おいしい、きれいな水を飲んでいることは幸せなことなんだと気づいた。

いつも使っている水のありがたさは、水が飲めなくなったり、ほかの水と比べてみたりしないと本当には分からない。私も山の水や違う水を飲まなければ分からないだろう。

私は今、山の恵みのきれいな水を飲んでいる。そして、そのきれいな水で育つたおいしいお米を食べることもできる。そのありがたさを忘れずに、ふるさとの自然を大切に守っていきたい。

入選

川に命を繋いで

岩手県

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年

梅村

琴音

宮沢賢治の物語には川がある。「やまなし」「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」「なめとこ山の熊」「カイロ団長」数え上げたらきりがない。清涼な空気、快い風。澄んだ川が流れ、魚が跳ねる。裸足になって遊ぶ子供たちの笑顔は、水と同じくらいキラキラと輝く。土を愛し、川を愛した賢治の目には、こんな川の流れが、さぞ眩しかったことだろう。

あるテレビ番組で、魚のゆりかごとという言葉を目にした。この言葉を聞いた時、私の家の前を流れる猿ヶ石川が頭に浮かんだ。家の川向こうには、魚を取るための梁がある。身近にある猿ヶ石川のことを詳しく知らなかった私は、祖父に聞いてみた。すると、知らなかった猿ヶ石川の姿が見えてきた。

昔は、今よりもっと水がきれいで、魚もたくさんいた。毎年、梁の近くの川に入り、川底の石を集めた。それらをひとつひとつきれいに洗って、乾かす。魚は、特に卵を産むときは、きれいな川を好むらしい。だから、汚れを落とした石をまた川底に戻しておく、魚が寄ってきたという。そして、食べる分だけ釣って、美味しくいただく。それが普通だった。今ではもう、そんなことはしなくなったけれどねと、祖父は少し寂しそうに語った。

その祖父の表情を見て、なぜそんなに美しくワクワクする、自然と人間が調和した習慣が無くなってしまったのだらうと思った。

やはり時代の変化だろうか。今では、スーパーに行けば、いつでも何でも売っている。わざわざ自分で釣る必要はない。また、農業に従事する人も減り、忙しいため、石を洗ったり、魚を釣ったりしている暇もない。

環境の変化もあるかもしれない。昔は魚にとって住みやすかったはずの川も、汚染や護岸工事、ダムの建設などで、どんどん住みにくくなっている。便利さを求め開発が進めば、自然との調和から遠ざかってしま

うのは必然だ。

では、どうすれば昔のような川に戻せるのだろうか。私なりに方法を考えた。例えば、下水道や合併浄化槽を使用する。浄化槽の維持管理を適切に行う。調理くずや食べ残しを流さない。食用油は絶対に台所などに流さない。食器等の油汚れはふき取ってから洗う。など、個人でできることはいくらでもある。このような取り組みや意識の改善、そして、自然への感謝が、美しい川をとり戻す力となる。

地域をあげての取り組みもある。東京、神奈川を流れる鶴見川の取り組みが良い例だ。「川づくり」の構想をまとめたのが、二〇〇四年策定された「鶴見川流域 水マスタープラン」だ。そこには、緑あふれる保水の森や谷戸があり、川の水量・水質が保全・改善され、災害への備えも万全な未来の鶴見川流域が描かれている。生活排水まみれだった鶴見川は、このプランや住民の活動により、魚が住めるほどきれいになったという。他にも、川を守る取り組みが全国各地で行われている。

調べていたら、猿ヶ石川でも取り組みが行われていることが分かった。「猿ヶ石川再生プロジェクト」というものだ。多くの命を育む美しく豊かな清流、猿ヶ石川を取り戻そうと、調査やセミナー、広く知ってもらうためのワークショップなどが行われている。私もこれからは、参加していこうと思った。

今でも猿ヶ石川では鮭の遡上がみられる。毎年秋になると、傷だらけの鮭が、卵を産むために、最後の力を振り絞って川を上ってくる。私は毎年見に行くが、いつもその迫力と命を繋ぐようにする鮭の姿に心が動く。「クラムボンは、わらったよ。」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ。」
可愛いカニたちの会話が聞こえてくるような、そんな清らかな私たちの川、命を繋ぐ川を、後生までずっと繋いでいきたい。

入選

感動を後世へと伝える

宮城県 女川町立女川中学校 三年 阿部 陽菜

私の住む女川町の大沢地区には、その名の通り大きな長い沢がある。綺麗な水が流れるその沢にはたくさんの魚がいて、その姿が見えるほど透き通った水が流れていた。この沢は私の小さな自慢で、誇りで、大好きな場所だ。家から二分くらい歩くと、その沢が見えてくる。昔はよく自転車などで友達と共にその横を無邪気に走ったものだ。幼い頃から、私はこの沢と共に過ごしてきたのだ。

小学二年生になったある日、私は祖父と弟と従姉妹と共に大沢へ遊びに出かけた。到着して恐る恐る水に足を入れてみると、氷のように冷たい水が、まだ幼い私の足を刺激した。少し驚きながらも、沢を眺めると、やはり綺麗な水だ。私は祖父に「この水って本当に綺麗なよね。」と言うと、祖父は「昔はよく夏になると、ここで水遊びをしたんだよ。」と教えてくれた。祖父が子どもの頃から、大沢は何十年も変わらない美しさを保っていることに、私はとても感動した。私が大人になっても、きっとこの沢は美しくあり続けるのだと思っていた。

そんな思いを一変するできごとがあったのは、それから一年後のことである。通学の途中、大沢の前を通った時、何だか異臭がした。今まで一度も嗅いだことのないような不快な臭いだった。この臭いは何だろうかと横を見ると、そこには、よく見慣れた大好きなはずの沢があった。しかし、いつもと大きく違うのは、その沢の水が汚く、底が見えないほどに濁っていたことだ。私は驚きでしばらく立ち止まってしまった。私の大好きだったあの場所はどこへ消えてしまったのだろうか。その時の私には原因が全く分からなかった。

その原因が分かっていたのは数日後のことである。沢に沿って歩いていると、向こうから歩いて来る人が、ペットボトルを捨てていた。「近くにゴミ箱があるのに、なぜ沢に捨てるのだろう。」私は悲しい気持ちになった。そして、水をまじまじと見ると、ペットボトルだけではなく、たくさん

のお菓子の袋や、雑誌までもが沈んでいた。きっと私が今まで気づかなかっただけで、何年もの間、たくさんさんのゴミが、この沢に捨てられていたのだろう。私は、とても大事なものを失ってしまったように感じた。私達の生活の中で「水」というものは、とても重要な役割を果たしてくれている。水がなかったら私達の生活は絶対に成り立たない。しかし、私達は水を大切にすることが忘れ、平気で汚してしまっていないだろうか。

例えば、五百ミリリットルの使用済み油を水に流したとしよう。これを綺麗な水へと戻すには、一杯十リットルのバケツが約九十九杯分必要になってしまう。たったこれだけの油を水道に流しただけで、たくさんの美しい水が汚れてしまうのだ。一つ一つの行動は小さいかもしれないが、それをたくさんの人が行うことによつて、何年後の人達が綺麗な水を知らないで生きていくことになってしまうのかもしれないのだ。私達には、美しい水を後世へと伝えていく義務があると思う。

大沢の水は昔のような美しさは失われてしまった。けれども、皆がこの沢を大切にすれば、きっと昔のような沢に戻ると私は信じている。だから私は、休日に友人と沢に来てゴミ拾いをしていく。私にできることなど、ほんの僅かなことかもしれない。それでも、水を大切にすることを、大沢を守っていききたい。そして、幼い頃に私が見た美しい景色を、私達の子どもに遺していきたい。

入選

未来への課題

宮城県 大崎市立古川西中学校 三年 福原 史乃

私の家は、見渡す限り田んぼだらけの田園地帯の中にあります。居間の窓からは、近年進んでいる構造改善という区画整備により、大型の農業機械も小さく見えるほど大きくなった田んぼに、まっすぐに伸びた畦道、その間を血管のように通る水路の風景が広がっています。そんな風景の中の一画で、祖父母も米作り農家として働いています。

冬の間、眠るように休んでいた茶色一色の田んぼに四月末、田植えの準備のため水路から水を引きます。水が満ちた田んぼは、水面が太陽の光に反射してきらきらと輝き、湖のようです。そして、水で潤った田んぼの中から蛙の鳴く声が聞こえ始めます。田んぼが目覚めます瞬間です。私は毎年、変わる事の無いこのような光景を見続けながら暮らしています。

我が家の米作りは、三月からスタートします。苗を作るための土作りや種まきなど、たくさん作業の中に「えだはらい」と言う仕事があります。大きく深い水路から小さな堀まで、冬の間積もった泥やごみ、草の根を取り除き、スムーズに水が流れるようにするための作業です。

米作りには、水はなくてはならない大切なものです。春の田植えから秋の収穫までに、何度も何度も田んぼに足を運び、水を引き入れたり、抜いたり、稲の成長に合わせて水量を調整していきます。まだ私が小さかった頃、農繁期の夕方、祖父母から「一緒に散歩に行こう。」と言われ、祖母に手を引かれながら畦道を歩いていると、祖父が田んぼの水を見ながら水路の配管のダイヤルを回し、水を出したり止めたりしていました。赤いダイヤルを回すと、大きく太い水道の蛇口から水が勢よく流れ出ます。そして大きな田んぼに水が広がっていきます。ただ、いつも一定量の水が配管から出てくる訳ではありません。水路の水は主に、大きな川からポンプで汲み上げられ、それぞれの水路に流れていきます。ポンプから田んぼが遠くなればなるほど水量は減り、思うように水

を引き入れられなくなります。また、水不足で川の水が少なくなったり、心ない人が捨てたごみにより配管が詰まったりして、田んぼに水をかけられなくなったりする事もあります。それでも祖父は、「まだ田んぼが小さく、水かけの度、堀に入りながら泥だらけで水の管理をしていた頃に比べると体は楽だ。」と言います。そんな話を聞きながら、黒くしわだらけの祖父母の手を見ると、楽じゃなかった頃の苦勞を思い、何だか悲しい気持ちになりました。

農家の高齢化が社会問題になっている中で、農地の構造改善による田んぼや水路の整備は大切な事業だと思います。ダイヤルを回せば水が出る。数十年前の祖父母には考えられなかった事に違いありません。今の私にとって当たり前の事が、ほんのちよつと前までは無かったように、技術は日々進歩しています。新しい技術発展により便利になっている反面、その技術を持っていてもどうする事もできない天災が度々起こります。

二年前の秋、近所を流れる渋井川が大雨により氾濫し、市内の住宅地や田畑を、あつと言う間に水浸しにしました。数日後に水が引けた田んぼには、横倒しになり泥をかぶった稲がありました。半年間苦勞して育てた収穫目前の稲が全てだめになっていました。幸い我が家の田んぼは無事でしたが、米作りの苦勞を知る祖父は、「本当に気の毒だ。でも自然のする事だから、どこにも当たりようが無いのだ。」と話していました。その後、氾濫した川は、新たに整備や工事が行われ、いつかまた起こりうる天災に備えられています。この先、米作りに必要な水が安定して得られ、その水が天災により人々に危害を加えぬように水路や川を整備し、管理し続けていける環境をつくっていく事が、大人になっていく私達への課題だと改めて思いました。

入選

勤行川の水

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 杉山 咲衣

「今年も鮭が帰ってきた。」

私はこれが当たり前だと思っていた。私の住む筑西市には、勤行川が流れている。勤行川では毎年、十月下旬から十一月下旬にかけて鮭の産卵のために遡上してくる光景を見ることが出来る。昨年も、朝の通学時、勤行川を通った時に鮭の遡上を見ることができた。

小学校三年生の時、学校の授業で、勤行川に鮭の稚魚の放流をした。稚魚は川を下って太平洋を北上し、オホーツク海などで成長する。約五年後、生き残った稚魚が川のおいをたどってもどつてくると学んだ。放流を主催した団体の方が、

「鮭はきれいな水でないとおいをたどつてこれないし、生きてゆけない。だから、町で鮭の姿を見ることが出来る勤行川は、とてもめずらしいんだよ。」

と言っていたのをよく覚えている。どこの川でもみられる光景だと思っていた私は驚いた。

今では川の底の石が分かるほどきれいに透き通った水が流れている勤行川だが、二〇〇〇年代半ばまでは汚れが目立ち、川岸には自転車やたんすなどの粗大ごみが多数あったという。そこで周辺の清掃活動を始めたところ最初に集まったごみは四トントラック十台分以上もあったそうだ。

また、下水道整備が進み、水質や川岸の環境が大きく改善された。川の環境が良くなったことで、鮭がだんだんと遡上するようになっていったのだろう。

私は、稚魚が大きくなって勤行川にもどつてくることと、これからもずっと鮭が帰ってこられるきれいな水の流れる勤行川であることを願って放流をした。

今年、私は中学二年生になり、十四歳の自立と未来への志をちかう「立

志のつどい」がある。式をむかえる準備として、昨年の三月に勤行川のボランティア清掃を行った。私は、自分の手で勤行川をきれいにすることがうれしくてはりきつてそうじをしに行った。

いざ、行ってみると思った以上にごみが落ちていて私は少し悲しくなった。河原にはたばこの吸い殻やレジぶくろがたくさん落ちていたり、川の中にはあきカンが投げ捨てられていたりした。驚くことに赤い大きなイスが平気で捨てられていたりもした。勤行川がごみと一緒に涙を流しているようで私は怒りを覚えた。それと同時に、捨てさせてしまう環境をつくってしまうことと、これくらいの事しかできない自分達の無力さを感じた。もっとみんなで勤行川を未来へと守っていくことができなのだろうか…。

私達の学年が鮭の稚魚を放流してから今年で五年。海へ旅に行っていた鮭がいよいよ勤行川に帰ってくる。鮭が帰ってくる勤行川は、筑西市、そして、私達の誇りである。透き通った水が太陽の光を反射してきらきら光り、鮭が力をふり絞って川をのぼる勤行川の美しいあの姿を、私達は未来へとつないでいかなければならないと思う。そのためには、この地に住む私達みんなが協力していくことが大切だと考える。

私は、今年からはいつもと違う気持ちで鮭をむかえたい。そして、当たり前ではなく、きれいな水や今まで川の水を守ってきたこの地の人達に感謝をしたい。これからは私達が勤行川の水を守っていくという気持ちを込めて、

「今年も鮭が帰ってきた。」

入選

「水は山の幸、人の幸」

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 三年 高橋 茉鈴

熱いシャワーを浴びながら大声で歌う。私のリフレッシュ法だ。だが、「水」について考え始めた今、他の方法を探りたいと思った。

地球で最初の生命が生まれた海。八月一日生まれの私は「水の日」に縁を感じている。

私が生まれ育つ佐野市には、古来関東屈指の清流といわれた渡良瀬川が流れている。しかし、明治期に足尾銅山から流れた鉱毒の影響で、生息する魚が次々と姿を消し、戦後も沿岸に工場進出が相次ぎ、川の汚染は続いたという。鉱毒被害と戦った佐野市の偉人、田中正造の足跡を学ぶ市民らが「サケが遡上する清流を取り戻そう」と一九八二年正造の七十回忌に合わせ、サケの放流を始めたのだ。私も小学二年生から自宅でふ化させた稚魚を放流する活動に参加している。毎年無事に戻るよう願って送り出す。最近では渡良瀬川でふ化し、産卵に戻ってきたサケもいるのではないかと言われており、母のような気もする。

また、煙害等で荒廃した足尾の山に木を植える植樹活動にも何度か参加している。緑の山を取り戻すには二〇〇年かかると言われているが、人間が責任を持って続けるべき活動だと思っている。蛇口から水が出て当然、川に水が流れていて当然だというのは錯覚だ。山に木があるから降る雨が地中に浸み込んだ地下水となり、時間をかけて地表に湧き出してくる。森は緑色の貯水池なのだ。森林を守り育てる担い手達がいる、初めて森林はその重要な機能を果たす。そして私達は水に恵まれ水害から守られているのだ。水と森と土と人。この機能が良くと地球は潤い、心が満たされるのだと思う。「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし。」正造翁の教えが改めて胸に突き刺さる。

日本では世界一きれいな水が当たり前に使える。しかし世界ではきれいな水を飲めない国が多いのが現状だ。私は今年マレーシアにホームステイすることになっているが、クアラルンプールの名前自体「泥の川の

町」を意味する。実際は少し郊外に行けばきれいな川も流れていて、水質は問題ないともいう。ただし水道管自体が錆びついていてフィルターを毎日替える家庭が多いらしい。説明会での注意点到「シャワーは五分以内」とあり、頭では分かっているものの正直驚いた。「川や森」という意識はこれからも大切にしたいが、まずは日々の生活を見直す良い機会だと思い、五分間練習を始めた。髪をよく解かしてからシャワーを浴び、シャンプーはできるだけ少量を手で泡立てて洗う。残り三分。ここで水を止め、全身だ。挑戦すると達成感を味わえ心まですっきりした。語学や文化を学ぶ機会に加え「世界の水」を考えるきっかけとなった。

現在世界の七億人が水不足の生活をしているという。しかも、不衛生な水が原因で毎日四九〇〇〇人の子供が亡くなっているのだ。二〇二五年には世界人口の三分の二が水不足になると予想されていることに驚いた。その原因の一つが輸入に頼っている日本の仮想水によるという。つまり大豆や小麦、牛肉等の生産に必要な水を八〇〇億トン、日本の水使用量全体と同じ量を海外で消費しているというのだ。私達は想像以上に途上国の生活を破壊していることに気が付かなければならない。そして、水の危機（無駄遣いしていること）を知り、徹底した節水（風呂、洗濯、トイレ、洗面、炊事、庭の水まき）をしていこうと思う。またできるだけ国産品を利用し、仮想水を減らすという意識をしていきたい。

熱いシャワーでのリフレッシュより大切なことが分かった。水は山の幸、そして人の幸。疲れたら水を見て木を思い、木を見て水を思い、生かされていることに日々感謝である。こうして私の心は満たされていく。

入選

水鏡と私

栃木県 下野市立南河内第二中学校 一年 星 優莉香

私にとっての水。身近なもので、なくてはならないもの。そつと、目をつむり心に浮かぶもの、それは「祖父の大切にしている田園の水」だ。祖母の家は栃木県、福島県、茨城県の県境にある。とても山あいにある村里だ。八溝山という、大きな山のふもとにある。山の小川にはヤマメが住んでいる。ヤマメはとてもきれいな水に住む魚である。そして、那珂川にはアユというおいしい魚が住んでいる。釣り人にとっては、アユも釣れ自然豊かな場所だ。私は、祖父と一緒にドジョウやサワガニをとって遊ぶことがある。祖父との思い出が沢山つまった場所である。

水がきれいだということは、沢山の自然や魚や虫に出会うことができ、とても素敵な事だと思う。幸せだなあ、と感じる瞬間だ。魚も泳ぐ、きれいな水、そんな町であってほしい。水資源豊かな国であってほしいと思つた。

私の祖父は、七十五才になるがもう何十年と米作りにはげんでいる。毎年春になると、自宅の庭先にある農業用ハウスで稲の苗を育てる。おんこうな祖父は、この苗を育てることを「稲の赤ちゃんを育てる」と言う。その時私は、祖父らしい優しい言葉だなどおだやかな気持ちになる。祖父の苗への愛情だと思つた。そんな祖父の笑顔が消えた年がある。私が幼稚園を卒園する年に東日本大震災が起きたからだ。自然災害というものは大変おそろしい、人間の力でコントロールできるものではない。多くの人がつらく悲しい思いをし、ここ数年大変な努力をし、乗りこえてきたことだろう。私はこの東日本大震災の後、小学校生活を六年間過ごしてきたが、人と人が助け合うということ、協力し合うことの大切さを学んだ。震災のあつた年、祖父の笑顔が消えたそのわけは、稲の赤ちやんだと言って自分の子供のように育ててきた苗を植えられなかったからだ。苗はハウスで適切な温度管理、水の管理を必要とし、農家の人にとっては大変な努力が必要だ。しかし栃木県と福島県の県境にあり、八

溝山のふもとにある大田原市は放射能を心配し、田んぼの一つ一つを水質検査したそうさ。その結果、心配いらぬことと少しおくられて田植えができたそうさ。その時、祖父は私にこんなことを言った。「八溝山が皆を守ってくれたんだな」豊かな山林、おだやかな川、私達の生活が守られた瞬間だった。その年の春、田んぼ一面に水を張り、青空の下で田植えをした。祖父の姿が幼かった私には印象に残つた。こんな思い出もある。祖父と私が並び、田んぼの水をのぞきこむ。なんと、鏡に映つたように私と祖父の姿が水一面に映し出される。とても気持ちの良い水鏡だ。自然の豊かさが、生み出した水の恵みだと感じた。祖父の田園は、全て山からの山水で米作りをしている。大変おいしい米である。山水で作られる水資源の豊かさと、祖父の愛情を感じる米である。

水と聞き、皆は水道から出る水、飲料水を思い浮かべることだろう。私もその一人だ。私は、祖父の家の水が大好きだ。井戸水で、とても冷たくておいしい。じゃ口をひねると冷蔵庫で冷やしたよりも冷たい水が出てくる。祖父と畑仕事をした後、大きなオニヤンマを追いかけた後、その後に飲む水はとてもおいしい。幸せだなと感じ、このコップ一杯の水が心をうるおしてくれる。最高だ。

私にとっての水とは、生活の一部でもあるが、祖父との大切な思い出、田んぼの水に映し出される山々、そして水鏡のように田んぼをのぞきこんだ者の姿が水に映し出される。そんな豊かな水資源国、日本。私は、これからもこの水の豊かさが続いてほしいと願う。おだやかな水の流れを見ていると人の心も、自然とやすまる。水の持つ力は、人間の食生活を支え、生きる全ての力となっている。水に感謝しよう。水鏡に映る私と祖父の姿がこの先もずっと笑顔であり続けますように。

入選

土地と心を潤す川の水

群馬県

群馬大学教育学部附属中学校

三年

高井

智大

廣瀬川白く流れたり

時さればみな幻想は消えゆかん。

これは、萩原朔太郎の詩「廣瀬川」の冒頭の部分だ。広瀬川と聞いて、大抵の人は仙台を思い浮かべるのかもしれない。しかし、ここに書かれているのは、利根川から分かれ、前橋の街中を優しく流れる川のことだ。

広瀬川の遊歩道沿いに建てられた文学館では、前橋出身の詩人が紹介されている。その代表である萩原朔太郎は、銅像となり川に向かって佇んでいる。周囲を走り回って遊んでいた園児の頃には、ただの塊だと思っていた。十年経った今、台座に寄りかかり、顎に手を当て物思いに耽る姿は、最近の自分と重なる。

川の流れば、考え事でいっぱいになった頭の中を洗い流し、新しい何かを運んでくれる。

学校からの帰り道、すこし気分を変えたい時は、この遊歩道をゆっくりと自転車で走る。穏やかに流れる深緑色の水が、交水堰で白く泡立ちもみ合いながら落ちてゆき、すぐにガラスのような水面を取り戻す。私はこの景色を眺めるのが好きだ。朔太郎の冒頭部分についても、この堰の様子を表しているとする説がある。

今、私たちの心に潤いを与えている広瀬川だが、実は疏水百選にも選ばれ農業を支えてきた広瀬用水という一面を持っていることを知った。かつて利根川は現在の広瀬川を流路としていたが、十五世紀頃の大氾濫によって川筋が西に移動したと言われている。氾濫後の土地を開拓するとき、利根川から元の川筋へ水をとって、用水として利用したのが広瀬川の始まりのようだ。

江戸時代には、分水して前橋城内や城下の生活用水としたり、舟運に役立てたりしていた記録が残っている。

さらに、明治三年に設立した日本初の洋式機械製糸場である前橋製糸

所では、広瀬川の水を動力としていた。その後も昭和に至るまで、川沿いの製糸場に、繭をゆで糸繰りする作業に使う大量の水を供給していたそう。広瀬川の水は、前橋の生糸産業を支えていたといえるだろう。現在も、利根川に再び合流するまでの地域を潤しながら、発電用水や都市用水としての役割も担っていることも忘れてはならない。

時代と共に姿を変えながら、人々の生活や産業、文化に影響を与え、前橋の歴史を潤してきた水の力に、改めてその偉大さを感じた。一方、豊かな水が身近にあるが故に災害にも見舞われ、その度に水を操る術を必死に進化させてきた先人たちの苦勞と努力に頭が下がる思いだ。

冒頭の「廣瀬川」の詩の続きは、絶望感と孤独感をにじませていて、私には朔太郎の薄暗い心の川底を知ることができなかった。しかし、川に翻弄されながら生活した人々が、決して諦めることなく次の時代へと水を繋いだことを知ると、川辺に佇む朔太郎に話しかけてみたくなる。

白く泡立つ幸福や希望のような何かが、この目に見えるのは堰を超え一瞬だったとしても、決して幻想なんかではなく、静まり返った流れの下に、今も溶け込んでいる。絶望と孤独を川に流して、新たな幸福をすくい上げて欲しい・・・と。

今年、朔太郎像の視線の先に、生家の書齋など三棟が移設され、広瀬川はいつもよりも賑やかな春を迎えた。朔太郎がこの風景を見ていたら、どんな詩を書くのだろう。そんなことを考える私は、今日また遊歩道を駆け抜けていく。

入選

水資源の行く末

東京都 東京都立桜修館中等教育学校 一年 大村 咲由良

「バケツで米を作るだけなのに、こんなに水が必要なのか。」
私は土の入ったバケツにホースで水を入れながらつぶやいた。小学校五年生の時のことだった。小学校の授業で米を育てるという課題があったのだ。

この日の作業は、一人一個のバケツに三種類の土を入れ、やわらかくなるまで水を足しながらひたすら混ぜる作業だった。土と水を手でかき回し続けて、約三十分。やっこのことで土が適度のやわらかさになった。たったバケツ一杯の土をやわらかくするだけなのに、何度も何度も水を足さなければならなかったことに、私は驚いた。

しかし、米作りで水が必要なのは、土をやわらかくする時だけではない。毎日の水やり。苗が植わった土に大量の水を注ぐのだ。バケツではなく、広大な水田だったら、何百倍、何千倍もの量の水が必要になるはずだ。

私の祖父母の家は、米どころと呼ばれる新潟県にあり、そこに遊びに行く道中、水田が多く見られる。よく見ると、あぜ道の両端に水路がひかれているのがわかる。加えて、田んぼの下には、田に水を入れたり、排水したりするシステムが作られているらしい。

私が学校で米を育てたようにバケツ一杯だったら、ホース一つで水量を調節できる。しかし、広い面積の田では、水を入れる、排水するだけのことが、大変な作業となるだろう。だからこそ、米を作る農家の人々は、用水路や田んぼの下のシステムを作り、水の管理が容易にできるよう工夫したのだ。

私達が米作りを始めてから約五か月が経ち、できた米をおにぎりにして食べるようになった。担任の先生は、クラス四十人全員が作った米を集めても、おにぎり二個くらいにしかならないだろうから、店で売られている米を混ぜて食べたらかどうか提案して下さった。その話を聞き、

私は驚愕した。大量の水を使って、時間をかけて一生懸命作った米なのに、クラス全員分でも、おにぎり二個にしかならないとは思ってもみなかった。自分が毎日食べている米は、私達のところに届くまでに、大量の水が使用され、農家の人々の努力があり、長い時間がかかっているものだということが、強く私の胸に残った。

地球にある水のうち、使いたい時にすぐに使える水は約0.01パーセントなのだそう。水は、とても貴重な資源なのだ。現在、日本では全国的に雨量が少なくなる傾向にあり、各地で渇水が発生している。私達は、もつともつと水を大切に扱わなければならない。もし、水が使えない状況になってしまったら、料理ができない、水洗トイレが使えないだけでなく、米を始めとする農作物が育たず、私達は日々の食料を確保することができなくなってしまうのだ。水は、私達の命を担っている。小学校の時の米作り体験で、水の大切さを私は実感として学んだ。

私は、水と関わっていく上で、次のようなことが大切だと思う。まず、水を出しっぱなしにするなどの無駄遣いをしないこと。家や学校で掃除をする時、洗い物をする時、バケツを用意するなど心の配りをしたい。次に、飲水のもととなる森林や川は汚さないこと。山や高原に行つた時、ゴミを川に捨てたり、むやみに木々を折ったりしないことが大切だ。そして、油などの汚れたものをそのまま下水として流さないこと。このような努力を続け、水の恩恵を重んじていけば、水資源と上手に関わっていくことができると思う。水資源の行く末は、今を生きる私達の手にかかっているのだ。

入選

人々の知恵と努力

神奈川県 カリタス女子中学校 二年 酒谷 香帆

水道の蛇口をひねれば水が出ることを当たり前に思っていた私は、今まで水についてあまり考えたことがなかった。そんな私が水のことを考えるきっかけとなったのは、祖母のこんな言葉であった。「そう言えば、愛知用水を作った久野庄太郎さんは、曾祖父の遠縁に当たる人なんだよ……」

私は五歳の頃まで愛知県の知多半島に住んでいた。今の私には想像もできないが、もともと大きな河川がなかった知多半島の人々は、昔、水不足にずっと悩まされ苦労したようだ。そんな中、安城農林学校教諭の浜島氏と共に木曾川から用水路を引くことを考え、愛知用水の建設に尽くした人が、農民であった久野庄太郎氏だ。二人は当時の総理大臣に陳情し、国の政策として用水路建設が進められ、昭和三十六年に愛知用水が完成した。おかげで、ため池や井戸に頼っていた人々の日常生活や農業生産は、著しく向上したそうだ。農民が作ったと言われる愛知用水は、正に生命の源であり、未来につながる貴重な財産だ。私からすれば、本当に遠い縁ではあるが、祖母の家に遊びに行った時、知多市の佐布里調整池を臨む高台に建立された愛知用水神社に感謝の気持ちを込めてお参りをした。早春に梅の花が咲き乱れ、心安らぐこの場所は、私のお気に入りの一つである。

その後の五年弱、父の仕事の都合で私はオランダに住んでいた。オランダは国土の四分の一が海面下にあり、至る所に運河が流れている。今、車で走っている、または自分が歩いている道路が海面下にあるという状況は、「何故、水より下に自分がいて平気なのだろう……」と不思議に感じられることだった。昔から、オランダの人々も絶えず水と闘い、築堤・干拓を行ってきた。海を締め切って作られた北部にある締切大堤防を見に行ったり、風車の仕組みや役割、オランダの水事情を学んだりしたことで、「世界は神によって作られたが、オランダ人はオランダ人によって作

られた」と自負する気持ちが分かった。私もオランダは、そこで生活する人々の知恵と努力によって作られた素晴らしい国だと思う。

そして現在、私は神奈川県川崎市に住んでいる。私の家の近くには、春になると桜がきれいな二ヶ領用水と多摩川が流れている。穏やかに見える今の川の姿からは想像もできないが、昔の多摩川は洪水が絶えず、「暴れ川」として知られていたそうだ。確かに市の洪水ハザードマップによると、多摩川の堤防が決壊すると私の家も一階は浸水してしまう恐れがある。幸い、繰り返し行われた堤防の改修や治水対策により、一七四年の多摩川水害以降は大きな災害は起こっていないようだ。日本各地だけではなく、世界各地で自然災害は起きているので、何事も日頃から備え、気をつけなければいけない。

愛知県、オランダ、神奈川県。私が今までに住んだどの地域の人々も安心して、安全に生活を送りたいという思いから水と向き合い、知恵を絞ってきた。人に喜怒哀楽があるように、水にも生命の源という顔、怒り荒れ狂う顔、人を襲うという顔、快適な生活を与えるという顔がある。私達の生活に欠かせない水は限りのある資源だから、水道の蛇口をひねれば水が出ることで、昔の人々の知恵と努力に感謝して日々生活していきたい。そして、私自身も未来にきれいな水という財産を残すため、水の無駄づかいをしない、水を汚さない等、自分にできることをしていきたいと思う。

入選

水不足の国、日本

神奈川県 洗足学園中学校 一年 板橋 彩歌

私たちの住む地球は「水の惑星」と呼ばれている。その地球上の平均降水量の約二倍の雨が降る日本において、水問題などあるのだろうか。

私は、生まれた時から災害時以外で水に困った経験は一度もない。多くの日本人にとっても日本における水問題は、一部の地域の問題だと思っ
ているだろう。しかし、二〇二五年には世界の人口は八億人を超え、
四八カ国で水が不足すると予想されている。そして日本は、世界中から
農作物や原材料を輸入しており、その生産に使われる水を間接的に使っ
ていると言える。つまり、水問題は日本の問題なのだ。

私はこの水問題に対し、水の再利用という点から解決策がないか調べ
てみた。

まず、下水を浄化処理して再利用する解決策がある。下水処理技術が
高いシンガポールでは、排水から生まれる水『NEWater』が飲用水とし
て使われている。飲用水として利用するには抵抗がある人も多いだろう
が、一番使われる農業用水や工業用水としての利用は有効だろう。例え
ば、自動車は一台作るのに約一二〇トン、牛丼一杯には約二二三八キロ
グラムもの水が間接的に必要らしい。沖縄では実際に、栄養素の入った
水として、再生水を農業用水に使う試みが始まっている。

二つ目の解決策として、雨水を貯水タンクなどに貯めて利用する雨水
利用がある。安価で簡単に行えるので、降水量の多い日本では、大きな
効果が期待できる。東京ドームでは客席の下にある雨水の貯水タンクの
水をトイレの洗浄や、消防用水として、活用が始まっている。一般家庭
においては、花の水やりや、車の洗浄などに使うことができる。

三つ目の解決策は、一般家庭における水の再利用の推進だ。家庭で一
番使用されるお風呂の水（二六パーセント）を洗濯に利用しても、まだ
半分近く水が残るので、余った水をトイレの排水に使えるような仕組み
があれば、お風呂の水を無駄なく再利用できるのではないか。

このように、水を再利用する方法は、いくつかの地域ですでに始まっ
ている。全国的に導入する為に必要なのは、技術的困難の解決ではなく、
水の再利用が必要だという認識不足の問題の解決であるように思う。現
在日本では一日に必要なとされる最低水量の実に六倍の水を使用してい
るが、一人あたりの降水量は世界平均の三分の一しかない。そう考えると
今の生活様式では、日本人は水を使いすぎていると言えるだろう。そし
て、四割しかない食糧自給率を五割にする為に必要な量は、日本に
は無いと言われている。このことから、安全な食糧や水を確保する為
に、水の再利用を進めていく事が今取り組んでいかなければならない大
切な課題なのだ。

昔からあるに任せて乱用する事を「湯水のように使う」というように、
日本人にとって「水」は簡単に手に入り、いくらでも使っているものだ
という意識があり、水不足だという認識を持ちにくいのだと思う。水は
循環し、地球上の全ての命を支える有限な資源なのだという認識を持ち、
一人一人が水不足の問題を真剣に取り組まなければならない時がきたの
だと思う。

入選

水を知る

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 三年 吉崎 萌流

水は大きなエネルギーを持っている。例えば、水を利用して発電する水力発電。二酸化炭素を排出しないため、環境に優しい。しかし、日本の発電量を一番に担っているわけではない。私は水力発電について、ここまで知っていて、それで知り終えたつもりになっていた。水に興味を持ち、知ろうと思うきっかけになるあの日までは。

私は昨年、金沢市役所環境局で職場体験をさせていただいた。職業観や勤労観を学ぶと共に、金沢の環境に触れた。環境に関する様々な場所を訪れたが、そこで最も目に留まったのが、本多町マイクロ水力発電所だ。一見すると何の変哲もない公園、本多公園。しかし、奥に進むと、周りの景色にそぐわない電光掲示板と小さな水路が姿を現す。そこで水力発電が行われているのだ。

「こんな所で水力発電？」
私は、今までの水力発電所のイメージとは異なる光景を目にし、驚いた。そして水に興味を持った。その水力発電所は、この公園の近辺にある観光名所の二十一世紀美術館や、日本三大名園の一つ、兼六園の陰に隠れるようにひっそりと存在している。だから金沢市民の多くはその存在を知らない。

この水力発電所の他にも、水は、自身が持つ大きなエネルギーで、私たちに多くの恩恵を生み出してくれている。石川県で生産が盛んな「コシヒカリ」や「ゆめみずほ」などのお米。おいしさの理由の一つは、春になると溶け出す雪解け水だ。チカチカと可愛らしく光る夏の風物詩、ゲンジボタルとヘイケボタル。ホタルは清ききれいな水の中でしか生きられない。金沢を流れる二つの河川、犀川と浅野川。アユやヤマメが上流に向かって懸命に泳いでいる姿や、河原の桜が落ちて桃色に染まっている川の姿は、金沢市民の心の癒やしであり、故郷の景色だ。金沢の伝統工芸品、加賀友禅。染色後に余分な染料や糊を洗い流す「友禅流し」

は冬の風物詩となっている。

金沢だけではない。水は世界共通の資源である。視点を金沢から世界に移すと、いかに日本が水の恩恵を浴しているかが分かる。日本では安全な水道水を家庭で得ることができるが、世界にはそうでない国がたくさんある。ある国では、人々が川から飲料水を得なければならず、川から水を運んでくれる人にお金を渡さなければいけないため、川の水の値段が高くなる。そのような国では、二百リットルの水の値段が約五百円になる。その一方で水道設備のある国では、同量の水の値段がたったの四十円である。日本は後者に属していて、水の恩恵をより浴しているといえる。

そして、こういった水問題を解決するために、世界水フォーラムの開催や、水事情を改善するための情報と技術を提供するといった国から国への援助が行われている。水道設備が整っている国は、整っていない国に援助を行うべきなのだ。

しかし、私たちは、たくさん恩恵を生み出してくれている水について何も知らない。あるいは、日常の一部になってしまっていて、何も意識していない。ここまでに挙げた水力発電や川や世界の水問題など、私たちは知ろうとしていない。知るといふ行為は、全ての行動の始まりとなる。水を節約したり、再利用したりしようとする声がよく上げられるが、私はその前にまず、水について知ることが大切だと思う。だから私は水について知っていいこうと思う。そして、知った上で水を大切に使いたい。

入選

技術提供という思いやり

岐阜県

多治見西高等学校附属中学校

二年

根崎

真由

「こんなに大きな施設、初めて見た。」

小学五年生の頃、私は名古屋市上下水道局の浄水場の施設を見学した。

「こんなに広い施設、どれくらいのお金がかかっているのだろう。」

私が疑問に思っていると、水道局の職員さんが教えてくれた。

「名古屋市にある三つの浄水場は、一年間にだいたい二百五十億円のお金で成り立っているのですよ。ここできれいにした飲み水を、二百万人以上の人々に配っているのです。」

これを聞いて、日本の人口の約一億二千万人に配るにはどれくらいのお金がかかっているのだろうと想像してみた。そして、毎年巨額のお金を使っていると知り、驚いた。

浄水場を見学し、次は、水の循環と書いてある掲示を見学した。そこには、水がどのように各家庭へ配られているのかが絵で説明してあった。まず、海水が温められ水蒸気になり、それによってつくられた雲が雨を降らせる。その雨水がダムや湖にたまり、その水が管で、川から浄水場へ送られ浄化される。そして、きれいな水が水道管を通じて各家庭へと届けられるそうだ。水が私達の手に届くまでには、湖や川などの地形や、雨などの自然現象と、ダムや水道管、浄水場などの人間が作った設備がうまく合わさっているからこそきれいな水が飲めるということに感動した。

日本は降水量も多く、先進国ということもあり、設備を維持する財力や水を浄化する高い技術もある。では、発展途上国のように財力が小さい国々は、どのようにして飲み水を手にいれているのだろうか。

発展途上国の中にも降水量の少ない乾燥した地域と、降水量の多い熱帯の地域がある。降水量が少なく砂漠が広がる乾燥帯の国々は、容易に水を得ることはできない。ある地域では、川に流れている水をくんでく

るために、女性や子どもが毎日十キロメートル以上の距離を、二リットル

ルのペットボトル数本分の量の水を背負って往復している。だから女性は職に就けず、子どもは学校にも行けていないというのが現状だ。私達日本人にとってはただ蛇口をひねるだけのことでも、水を手に入れるという同じ行為のために、何十倍もつらい思いをしていると知った。

一方、降水量の多い熱帯気候の国々は、年間降水量が日本を超える所もある。しかし、浄水場設備が追いつかず技術も低いために多くの国が気候の特色を生かしきれっていない。

この現状を知り、水を手に入れられない人々がどれほど大変な思いをして暮らしているのか考えただけでつらい。水は、私達人間にとって必要不可欠なものだ。水を手に入れるために学校へ行けず技術も学べないのだったら、これ以上技術は高まらない。また、技術が高まらなければきれいな水を手に入れることはできないという悪循環が生まれている。そのような国に技術を提供している機関がある。それは、JICAという日本の組織で、発展途上国への国際協力を行っている。浄水場の改修や拡張にも手を貸している。このように、苦しんでいる国の人々を助けることで、誰もがいつもきれいな水を手に入れられるようになることを強く願う。そして、恵まれた日本の自然環境と高い技術があることに感謝し、その技術を一人占めするのではなく、世界中の貧しい国々に伝えることで全ての人が豊かに暮らしていけるようになってほしいと思う。そのため私は、海外の人とコミュニケーションがとれるように英語を勉強し、国際協力ができる仕事に就くことを目標に努力していきたいと思う。

入選

未来へつなげる私たちの水

静岡県

不二聖心女子学院中学校

二年

土屋

こころ

「なあ、ここ。川をきれいにするにはどうすればいいと思う？」
祖父から急にそんな質問をされた私は困ってしまった。

「え……えつと、みんなで掃除するとか？」

「そうじゃない。まず一番にすることは汚さないことだ。それから、水を絶やさないと。水が枯れるなんてことになったら元も子もないからな。最後は、きれいな川をみんなで維持していくことだ。回りの人たちみんなで気を配って、きれいなまま保たなければいけないな。」
と、そのとき祖父は教えてくれた。

私が住んでいる街は水の都といわれている三島市である。三島には、源兵衛川というきれいな川があるが、昔はゴミが散乱して汚れ、工場が地下水をどんどんくみ上げたため湧水が枯渇してしまうという時期があったそうだ。これではいけないと立ち上がったのは市民の人たち。市民、企業、行政が協力し合い、環境の改善に取り組もうと「グラウンドワーク三島」を組織した。地元企業に川に水を流してほしいと要請し、事業の推進にあたっては、徹底的に行政と市民との話し合いが行われた。また、川の再生方法や事業によってさらに環境を傷つけはしないか等、時間をかけて何回も勉強会が開催された。このような地域住民の想いを取り入れた水の環境整備が長い間行われ、源兵衛川は再び美しい水辺へとよみがえった。

源兵衛川は私もよく遊びに行く。夏でも水が冷たくて気持ちが良いし、カワセミやカモ、ホタルもいる。けれどそんな源兵衛川が七年もの歳月をかけてこのようによみがえったのだということは知らなかった。七年といたら私が生きてきた時間の半分である。そんな長い時間をかけてきれいにした源兵衛川をこれからも維持していかななくてはならない。祖父の言葉にあった最後のポイント「きれいな川を周りの人たちみんなのできることを、きれいなまま保つ」ということだ。そのためにできること

はなんだろう。

まず、三島市民として市が決めたことは守らなくてはならない。例えば、ゴミの分別や油の処理法など。ゴミ分別の意識が高まれば、生活排水にゴミを流すことや、むやみに川にゴミをポイ捨てするなどということがなくなる。油の処理をきちんとすることは、水を汚染しないために家庭ができる大きなことだ。水の環境は取り戻すのに時間がかかる。だからまず「汚さない。」そのためにきちんと取り決めを守っていくべきだと思う。

それから、「知る」ということも有効だと思う。源兵衛川のように、身近にある川がどのように再生したのか、守られてきたのか。それを知ることによって環境が維持しやすくなると思うからだ。

そして「行動する。」知ったことを伝える、ゴミが落ちていたら拾うなど、小さなことでもいいからやってみることが大事だと思う。

水はあってあたりまえだと思いがちだが、もしなくなってしまうたら生活はもろろん、生きていけなくなってしまう大切な資源だ。この大事な資源をいつまでも受けられるよう、私たちみんなが意識して維持していきたい。

今、三島は富士山の湧水に恵まれ、ホタルやカワセミが飛び、水の仕掛けがあちこちにある、街の中がせせらぎでいっぱい豊かな水の街となった。美しい流れは私たちの心を癒やし、街をやさしきで包んでくれている。そしてそれは、長い年月と多くの人の苦勞によって取り戻されたのだということを忘れないで、私たちが一歩一歩行動を起こして守っていきたいと思う。

さあ、まずはこの水の話の話を兄弟や友達に話すことから始めようかな。

入選

雨乞いの精神を忘れずに

愛知県 豊橋市立南部中学校 二年 中尾 捺美

「なもーあみだぶー チン(鉦の音)なもーしゃかむにぶー チン なもーへんじょこんごー チン なもーかんじざー チン なもじぞー チンドン(太鼓の音)あめたもーチンドン あめたもー チンドン あめたもーチンドン、チンドンチンドン」意味「阿弥陀様、お釈迦様、大日如来様、観音様、お地藏様、帰依しますのでどうか雨を降らせてください」

ここは愛知県田原市浦地区の笠山(標高78m)。頂上には雷電社と呼ばれる竜神様を祀る祠があり、村人たちが鉦や太鼓を持ち寄って雨乞い踊りをしています。私の祖母はこの浦地区に生まれ育ち、まだ幼い頃、村人たちが集まって雨乞いをしていたと聞いていますが、上水道や豊川用水が整備された昭和40年代前半を境に雨乞いする習慣は廃れてしまったそうです。この雨乞い踊りの唄は、私が祖母と一緒にお風呂に入った時、面白おかしく歌いながらおしえてくれました。

なぜ浦地区の村人は雨乞いが必要だったのでしょうか？田原市周辺は、梅雨の降雨が少なく、梅雨が明けた後の干ばつがひどく、田原市自体が三方を海に囲まれていて井戸を掘ってもなかなか真水が出なかつたからだそうです。だから、昔の浦地区の村人たちは日頃から農業用ため池をあちこちに掘っておき、畑仕事にはこの水を利用したのだそうです。このため池は、各地を修行のため遍路していた弘法大師が作ることを教えて下さり、弘法水という伝説として残っているそうです。

私は祖母に、上水道のない時代の話を書がみました。すると祖母は昔を懐かしむように私に話してくれました。まだ祖母が小学生だった頃の話ですが、各家庭には水瓶という飲み水用大瓶があり、樋から集まった雨がその瓶に流れ込むようにできていたそうです。しかし新たな雨が降らないといつの間にかボウフラ(蚊の幼虫)がわき、溜めた水が飲めなくなってしまうために、その大瓶で金魚を飼っていたそうです。そうす

ればわいたボウフラも金魚がきれいに食べてしまい大切な水を無駄に捨てなくて済んだそうです。今現在の私たちの生活からは想像も出来ないことです。なぜなら私たちは蛇口をひねればいつでも好きなだけ汚染の無いきれいな水を手に入れることができるからです。私が生きた時代に生まれていたらと思っただけで耐えられそうにありません。だから祖母は日頃から、

「水が一番大切なもの。すぐに手に入るとかタダだと思って粗末にしてはいけない」と切々と言います。

私が住んでいる豊橋にも農業用ため池(なまず池)があり、私の通う豊橋南部中の生徒が毎年ボランティアとしてその池や周りの清掃活動や環境美化、水質保全に協力しています。そしてその実績が認められ、南部中はユネスコスクールに認定されました。私もそのボランティアに積極的に参加して、環境を守って行きたいと思っています。また豊橋には豊川という大きな川が市内を流れていますが、この川の支流の清掃活動には家族ぐるみで10年前より毎年参加しています。

私がボランティアとして活動を続けているうちに分かってきたことがあります。それは「水を守る」ということは、節水に心掛けるということと、水を汚さないということです。世界各国ではすでに飲み水を巡って争いが起きていますし、東京豊洲では土壌を含む地下水の汚染が原因で未だ築地市場の移転がなされず、大人たちが連日犯人捜しに躍起になり大揉めに揉めています。

上水道が整備され便利になった現在、村人たちは雨乞い踊りやその唄を忘れ、水に対する感謝をも忘れてしまっています。そしていつかまたそんな時代が来るかもしれません。「後悔先に立たず」という諺で悔やむ前に「転ばぬ先の杖」としたいものです。

入選

健やかな森が育む水資源

愛知県 岡崎市立新香山中学校 三年 鈴木 海斗

「わあっ。森に光の穴が空いたよ。」

歓声と共に、うっそうと暗かった森の中にまぶしい陽の光の矢が差し込んだ。無造作にひよろつと伸びたスギの木は、切込みを入れられ、ザザーと音を立てて倒れた。天井にぽっかりと現れた光の穴をくぐって、陽の光が地面に届いた瞬間、周りの空気も動き始め頬に風を感じた。森が息吹を始める予感。小学校の頃に体験した間伐作業の記憶だ。

どの木を、どの程度間伐するか、知識と経験が必要なことはもちろん、足場の悪い山の斜面で安全に行くことは、相当ハードルが高い作業で、なかなかほかどらないのだと森林組合の方から教えられたことを覚えている。私の通う新香山中学校は、岡崎市の北部に位置し、周囲は山で囲まれている。一般的には、緑豊かな環境に恵まれていると言えるであろう。自分でもそう思っていた。

部活動をしていたある日のこと。私は陸上部で、いつもの様にトラックを走っていたところ、突然の豪雨に見舞われた。最近では、こういう気象状況も珍しくはなくなってきた。部活動は中止になり、すぐに下校することになった。その帰り道のことだった。強い雨が降ると、山の上にある学校から下る道路が川の様になるのは、今までにも何度か経験はあったのだが、その日は別のことに気づいた。森から泥水が道に大量に流れ出て、褐色の泥流に覆われている場所に遭遇した。側溝も同じ状態であふれていた。

「こんなに森から土が流れ出て、大丈夫なのだろうか。」豪雨の中、ずぶ濡れになりながら、私は漠然とそんな不安を覚えた。

カラリと晴れた翌日、登校時に昨日の場所にさしかかった。道には、粘土質の泥が大量に流れ出した状態で固まっていた。流れの元になっている森の中を覗いて、「あつ。」と私は思い出したのだ。ひよろつと過密に生えたスギ、陽の光が届かない暗い森。表面の土が流れてしまい、根はむき出

しに見える。まるで「もやしの森」だ。以前に体験した間伐作業の森にそっくりではないか。これまで緑豊かな環境だと思っていたが、よくよく観察してみると、涵養機能が衰えた状態が、実はこんな身近にも存在していたのだ。

最近、各地で台風や集中豪雨などの気象状況を原因として、山地で土砂崩れが多発している。日本には、きちんとした間伐がされず長年放置されている森林が多く存在する。一見してみれば緑豊かな印象だが、森の中は暗く、下層植物が失われ、根はむき出しとなっている。水源の涵養機能が失われ、まるで「緑の砂漠」の様な状態であるという。間伐は必要だが、そのための現状把握さえ、なかなか進まないのが実情だそう。

そこに一歩踏み込んだ活動が『森の健康診断』である。市民や研究者、ボランティアが協力して、自然と親しみながら樹木の過密の程度や植生などを調査し、森の荒れ具合を診断する。「愉しくて少しためになる」を合言葉とする団体の活動である。まずは、どの位不健康な森があるのか、参加者に気づきと学びの機会を提供し、自発的活動が広がるきっかけとなればと、決して無理をしないスタンスでの継続的活動が評価され、先ごろ行政からも表彰されるなど注目を集めている。

このような地道な活動が、森林保有者、行政など多くの関係者に影響し始めている。その連鎖が、適切な間伐へと繋がりを、雨を再び土壌にゆっくり浸透させ、洪水や渇水を緩和しながら澄んだ美しい水を生み出す森林の体力、「緑のダム」の機能回復への力強い後押しになればと切に願う。私は、森林の持つ水源涵養機能に関心を持ち続け、いずれ機会をみて、活動に加わってみたいと思っている。

健やかな森が育む水資源、この大切な宝物に心を寄せ、知恵を絞り、守り未来へ繋ぐ努力こそ、私達に、今、必要とされている。

入選

農村民泊で学んだおいしい野菜の秘密

京都府 龍谷大学附属平安中学校 三年 井上 舞

遂にこの日が来た。美山での「農村民泊」目の前には茅ぶき屋根の家が並んでいる。期待でいっぱいだった。京都でも都市部で便利な暮らしをしている私達。自然に囲まれ、少し昔の生活体験も楽しみだった。昼間は、ふかふかの土に埋まっているじやがいもなどの野菜を収穫させていただいた。畑作業は初めてだった。驚いたのはどれも野菜が生き活きとして見えることだった。夜は、民泊の家族の方々と一緒に、取れたての野菜を囲炉裏で寄せ鍋にしていた。今まで食べたことのない様な野菜のおいしさだった。その時に、

「おいしい野菜は、きれいな自慢の水からしか育たないのよ。」

とお話いただいた。野菜が育つ為の要素として、水、酸素などが挙げられるが、水も酸素も自然の豊かさがたくさん命に代わっている事を実感した。おいしい水が、おいしい野菜や米を作り出し、おいしい水は美しい森から作られるという事だ。確かに民泊でお世話になったお家の周りには、空気も澄んでいて、森と共存して生活されていた。私は、自然に囲まれた生活にうらやましさを感じるとともに、おいしい水や野菜を生み出す為の山を守るご苦労や、都会生活で慣れた便利さを考え、私もっと日頃から水に対して感謝しなければならぬと思った。

美山で飲んだ、本当においしい水の元をたどると、森につながる。雨が森の土へ染み込み、地下水となり川につながる。たくさん天然水を生み出すには、山の木々を守っていく必要がある。なぜなら、ミネラル豊富な恵みの地下水として湧き出てくるには、何百年とかけ落ち葉や土を通りぬけ、「ろ過」する必要があるからだ。しかし、日本の中でも便利さや開発を優先してきた街は、美しい山も川も健康をも損なう。都市開発によって木を失った山は、地すべりを起こし、大雨のたびに街を破壊する。そして人々がゴミなどを気軽に山奥に捨てる事で、川の水が汚染され、安心して天然水を飲む事が出来なくなる。木々の根が山を守

ってきた事を無視した結果が、人々から美しい水だけでなく、平和な生活をも奪ってしまう。その為、私はふだんの生活でも美しい町、ゴミのない川を守っていく心がけを広める必要があると思った。いつも蛇口をひねれば、簡単に浄化され消毒されたきれいな水が出てくる。浄水の技術だけに頼るのではなく、水や森のありがたみを理解する事が必要だ。水の恵みがなければ人間をはじめどんな生物も生きてはいけない。水に対してもっと、感謝の気持ちを持ち、安心して飲める天然水を将来の子ども達に残していかなければならないとも感じた。

美山には美しい風景の四季があり、まだまだ木々豊かな山や川が残されている。それは、自然を守る為の保全活動や、昔の生活を大切にスローライフの考え方に支えられているからだ。景観としてだけでなく、山や川を優先的に守る事を継続されてきた歴史が、美山の野菜に残されたおいしさとなって表れているのだと思った。それは、『おいしい野菜はきれいな自慢の水から』という美山の方の言葉に込められている自信からくる思いだと感じた。

私はこれからも、未来の子ども達の為にもおいしい水を残していきたいと思う。冷たい川の水で顔を洗ったり、のどを潤してみたいとも思う。美山の方々が豊かな森を残し、自慢の水で野菜をつくってこられてきた様に、私達が森を守っていく必要性を伝えていかなければ、天然のおいしい水は消滅してしまうかも知れないのだ。今度は私達が「おいしい野菜はきれいな水から出来ているんだよ。森を守る事が大切なんだ。」と、自信を持って伝えられる様に。

入選

「ゴロン、パニ、デン」を心に

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

一年

藤山

さゆり

「ゴロン、パニ、デン」

二年前の冬、父が仕事でバングラデシユに行った時に覚えたという言葉だ。この言葉はベンガル語といい、語順は日本語と同じで、「ゴロン」は「温かい」、「パニ」は「水」、「デン」は「ください」という意味だ。父が滞在した町では水道、電気も通っていない。当然、シャワーもないため、体を洗いたい時にはこの言葉を使う。すると、宿泊施設の人がバケツ一杯のお湯を持ってきてくれる。そこにバスルームの蛇口から出てくる少しにごった井戸水を混ぜ、適温にしてから使用する。コンクリートでできたバスルームは、蛇口とトイレと排水口だけがある空間で、トイレはプラスチックの手桶に汲み入れた井戸水を勢いよく流し、その力で洗浄する。この町ではご飯を作るのも、体を洗うのも、洗濯をするのも、全てその井戸水を利用していているという。

テレビや本を通じて知るのは違い、父の実体験を聞くことで、今の日本では考えられないような他国の暮らしを身近なものとしてとらえられるようになった。

ちょうどこの頃読んだ『百年後の水を守る』という本には発展途上国の水問題として、バングラデシユの水事情が挙げられていた。父が滞在した町のように水道のない集落では、井戸を掘って水を汲む。川や池はあるが、下水道が整備されていないため、それらの水はウイルスや病原菌に侵されているのだ。しかし、井戸も必ずしも安全ではなく、一部の井戸水はヒ素に汚染されている。そのような井戸は目印に赤いペンキが塗られているのだが、生活に必要な大量の水を、遠くの安全な井戸まで毎日汲みに行くことはできない。そのため、その色の意味を知る人も知らない人も、「今日という日を生きるため」に汚染された水を飲み続けるという。私は衝撃を受けた。

世界には、バングラデシユ以外にも深刻な水問題を抱えている地域が

たくさんある。水不足は単に生活に必要な水が足りないというのではなく、食糧・健康・教育など人々の生活や環境の全てに影響を及ぼす問題である。そして、水不足によって奪われたものは、さらに人々からそれらを解消する機会を奪っていくという悪循環も生み出している。

目に見える水不足だけが水問題ではない。多くの農作物や製品を輸入に頼っている日本のような国は既に水不足に直面しているのだ。それなのに、私たちはまだ水不足を現実の問題として捉えることができていない。それは日本は島国で、降水量も多く水資源が豊富なイメージがあること、又他の国とつながっている川もないため「水は世界で共有するもの」という考えが起りにくいことも原因となっているのだろう。蛇口をひねればいつでもきれいな水が出るといふ恵まれた環境が当然となり、毎日気軽に水を使い続ける私たち日本人は、水の大切さを忘れてしまっている。

日本での水問題、それはあまりにも水問題を知らずに行動している人が多いということだろう。水問題は一部の国や地域だけの問題ではないことを認識し、世界で協力し合い、行動を起こしていかなければ解決に至らない。そのためには国際的な支援や保護、技術開発などの大きな取り組みだけではなく、一人一人がその問題を意識し、少しずつでも努力しながら、日々の生活を送ることが大切なのだ。

今の私にできること。それは水問題についての知識を深め、自分なりの改善策を生み出すことだと思う。今の自分のことだけを考えてはいけない。大切なのは世界や未来にも目を向け、地球全体の問題を把握し、共有し、個人が責任ある行動をとること。

「ゴロン、パニ、デン」

私はこの言葉を心に持ち、貴重な資源を使い続けるために、自分ができることは何かを常に考えながら、これから生きていきたい。

入選

父の仕事と未来の水

大阪府 高槻中学校 一年 矢野 七海

「サクツ、サクツ。」

父が山を登る。父は、月に一度、湧水の調査のため、全国の水源を歩き、水を取り巻く植物や土壌の観察をしている。父の仕事は、水の研究である。

ひとことで水の研究といっても、多岐にわたる。父は、近年は主に地下水の調査をしている。地下水は、雨水が地中にしみ込んでから、二十年という長い年月をかけてできるのだという。人間が地下水を飲み水として安全に使用するためには、雨水がどのような土壌を通ってきたのかを把握する必要がある。父の研究は、目には見えない地下水の流域や流量を明らかにすることが目的なのだ。

また、将来にむけ安全な地下水の確保のために、森林を守る活動もしているのだという。硬い土壌は雨水を地下に通しにくいのが、柔らかい土壌では、多くの雨水が短い時間で地下にしみ込む。ふかふかの土壌を作るために、父は間ばつを手伝うこともあるのだそうだ。

父は、海外に出張に行くことも多い。そこでは、最新の研究成果を発表して、同じ研究をしている人たちと議論をしたり、日本での活動の知識を活かして、海外の水源を守るお手伝いをしたりしている。水の問題は、国や地域によって異なるが、どうすれば解決できるのかを一緒に考えるのだという。

私は、今まで、水は蛇口をひねれば出てくるものだと思っていた。水のある生活が当たり前すぎて、水がなくなってしまうことを想像したことがない。小学校で、水育という授業があった。世界には、水に恵まれていない国が多く存在し、安全な水が簡単には手に入らない人が何億人もいるということを学んだ。

地球は水の惑星と呼ばれている。豊富に水を蓄えているように感じていたが、なんと人間が使うことのできる水は、たった0.01%なのだ。

そうだ。

「水は石油とは違うんだよ。石油は一度使ったらなくなってしまうけど、水は絶えず循環しているんだ。だから、人間が使い方を間違えなければずっと使い続けることができるんだ。」と、父が教えてくれた。水は、炊事や洗濯だけでなく、田んぼでお米を育てる時にも使われている。夏のプール、シャワー、お風呂にトイレ。

山形に住んでいる祖父母は、東日本大震災で、しばらくの間、電気やガス、水道が使えなかったという。水道が止まった時、飲み水の不便よりも、トイレの水が使えないことがつらかったらしい。調べてみると、水洗トイレの利用には、一回あたりおよそ10Lもの水が必要なのだそうだ。私が予想していたよりもはるかに多い水が必要なのだと思い、驚いた。

父の話を聞くうちに、私は今使っている水が、実は昔から存在している水で、未来でも使われていく水でもあるのだと気づいた。しかし、豊富にあると思っていた水には限りがあり、工夫して利用しなければいけないことがわかった。

私は、二十年先の未来の水のために仕事をしている父をほこりに思う。だが、父の仕事は水を工夫して循環させ利用する取り組みの中のほんの一部なのだろう。私たちは、多くの人々の活動に支えられ、水を利用してきているのだ。そのことに気づき、感謝しなければならぬ。私はこれから、水のある生活は決して当たり前ではないのだと意識して、未来の人々のために、水を大切に使う工夫ができるように努力していきたい。

入選

命とつながる水と生きる

島根県 松江市立八雲中学校 一年 石倉 要

毎年、三月下旬になると、葉ワサビの手入れと収穫のためにぼくは山に入る。砂防ダムを越え、川の源流に向かい、細い山道を進む。雪害で倒木や道がくずれているために、冷たい沢の中を歩いて進まなければならぬ所もある。ウラシマソウやトリカブトなどの野草が多く見られるようになる。山の神に支配されているようなりんとした空気が広がる。手がちぎれそうに冷たい沢にはサワガニが歩いている。大きな石を裏返すと、カワゲラやカゲロウなどのきれいな水にすむ生き物が見られる。魚は見られない。七十代後半の大おばによると、子どもの頃に一匹だけ魚えいを見たことがあるそうだ。斜面をすべりながらのぼり、葉ワサビの生育の状況を観察する。ワサビの根は浅く、茎も葉もやわらかいので、一株からほんの少しだけ茎をそと折って収穫する。つぼみは辛くなるので、葉よりも優先して収穫する。茎はみずみずしく、沢の水を十分吸って生育していることが感じられる。折り取った茎の先端から目にし激を感じるような青くさいにおいがする。気温が上がると、ワサビの真っ白の花が沢中に広がり、とても幻想的だ。葉ワサビは、沢の水のめぐみを最も受けている植物だと思う。葉ワサビが生育しない山は、里山ではなくなってしまうのだろうと思う。

この沢から流れる水は、砂防ダムに注ぎ、今までは簡易水道の水源として使われていた。現在、ぼくの家の水は隣接する雲南市木次町にある尾原ダムから提供された水道水と別の沢の山水の両方を利用している。山水は主に野菜を洗うのに使っているが、雨の日にはごった水になり、神社の上の沢の水かさが増え、流れる勢いがついていることが想像できる。水道水の水が、十分にろ過され、安全性を確かめた上で提供されていることがよくわかる。

水道水を提供する尾原ダムは、我が家から二十キロ、車で一時間の所にある。去年十一月に中国土木学会の斐伊川インフラツーリズムでこの

尾原ダムや三成ダム、斐伊川分流せき、来原岩樋を見学した。保育園の時に見た尾原ダムは、大型ブルドーザーやダンストラックが何台もいる巨大な茶色の穴ぼこだったが、今はその穴に豊かな水をたたえ周辺には木々がしげついていた。特別に入室させていただいた制御室には、ダム全体を見渡せる広い窓と何台ものモニターとパソコンがあり、気象状況と水位や水の流入・流出量などのデータが次々と表示されていた。ぼくは、ダムの豊かな自然にいやされると共に、自然に立ち向かう勇かな人間の姿に心を動かされた。

この水は、宍道湖の湖底に配管し宍道湖の北の市町村にも送られている。遠くの広い地域まで水を送るには、たくさん水と圧力が必要になる。ぼくは、奥出雲の自然の強大さを思い知らされた。尾原ダムには水を供給する働きと川の水の強大な力をコントロールし、水害から人間を守る働きもある。斐伊川は、天井川なので洪水が起きやすい。だから、大雨の時はダムでしっかり貯水し下流を守る。

斐伊川の力は、こうしたダムの力でもかなわないことがある。ほんらんしそうな時には、斐伊川分流せきで神戸川に放水をする。そうすることで、宍道湖に流れる水を減らし、宍道湖周辺に住む地域の人間の命を守る。

ぼくは、見学を通じ、里山を守る活動をする時、地球の環境保護を考える時、人間の命を守る防災の視点をもつ必要があることに気づいた。ダムやせきを造ることは元の自然を変えることになるが、人間の命にはかえられない。どこまで豊かな水の力をかりるのか、どの部分からは人間の知恵で自然災害を防ぐのか。ぼくは豊かな水でうるおされた自然とふれあい、対話しながら、時に歴史上の水対策に力を注いだ先人たちに思いを寄せながら日本の水を守る方法を考え続けていきたい。

入選

魂の水

広島県 広島城北中学校 一年 三好 司真

僕にはお気に入りの場所がある。家から徒歩三分のところにある京橋川の川土手だ。京橋川は広島市の街地デルタを形成する川の一つだ。広島は「水の都」とも言われていて、水辺の景観づくりと活用が計画的に進められているそうだ。例えば、水辺にオープンカフェがあったり、陸の玄関口である広島駅前と観光名所にもなっている平和記念公園を結ぶ水上タクシーが運行されたりするなど、川はにぎわいづくりの拠点にもなっている。しかし、僕のお気に入りの場所は、水辺に大木の立つところも静かなところで、たまにジョギングや犬の散歩で通りがかる人がいるくらいだ。

京橋川では、しじみ漁をしている様子を見かけることがある。しじみは、汽水域と呼ばれる淡水と海水が混じり合う場所だとれる貝で、きれいな水質が保たれている中で、育っているのだと思う。また、「雁木」と呼ばれる川岸から水面まで降りられる小さな石の階段がある。かつては生活物資を運搬する小舟の船着場として使われていたそうだ。この雁木を降りてみると、カニの巣があったり魚が泳いだりしているのを間近に見ることが出来る。水鳥も気持ちよさそうに漂っている。時折、川風が吹いて、水面がゆれて輝く。僕は落ち込んだり、悩んだりしている時によくこの場所を訪れる。自然に囲まれ、川の流れを眺めると、とても穏やかな気分になれる。そして、がんばってみようと前向きな気持ちで湧いてきて、元気になれる。僕の心にうるおいが注がれる。だから、お気に入りの場所なのだ。

この京橋川の本流は、広島の水道水のもととなっている太田川だ。小学校の授業で習った水道にまつわる詩がある。まど・みちおさんの『水道のせん』だ。水道のせんをひねると水が出る。水道のせんさえあれば、いつ、どんなところでもきれいな水が出るものだというように、と始まるこの詩から、二つのことを学んだ。一つは、当たり前だと思っ

ことは、誰かが当たり前をつくっているということだ。普段、日々の生活の中で、当たり前のように、きれいでおいしい水を容易に手にすることが出来るのは、自然の豊かさに加えて、たくさんの人々が水道事業に携わって蛇口まで水を届けてくれているお陰なのだということである。もう一つは、水を持つ大事な役割と水の大切さについてだ。森に降った雨は、やがて川の流れとなり、農業用水、水道水、工業用水など幅広く利用されている。同時に、川に住む生物や水辺の植物を育む。人間の生活を便利で豊かにする役割があるとともに、多くの命にうるおいを与えるものだと思えたことである。

「あの日、体中にやけどを負った大勢の人がこの川にやって来とったんよ。『水をくれ。水をくれ。』言うての。」

僕のひいおばあちゃん、一発の原子爆弾によって、僕の住む広島の一帯が火の海となった七十二年前のあの日の様子を語ってくれたことを思い出した。身近に流れる川が、まさに命につながる魂の水をたたえているのだということを知った体験だった。そして簡単に蛇口から放水できていけば、火の海はそれほど広がらなかったかもしれないし、簡単に蛇口から水をすくって飲むことができていけば、つなぎ止めることのできた命もあったかもしれない。水はたくさん命を救えるものだと改めて感じた。

僕のお気に入りの場所から川の流れを眺めると気分が落ち着き、元気になれるのは、命につながる水を持つ力のお陰なのだと思う。この穏やかできれいな川の流れが、将来にわたって続くように、水の大切さを忘れないでいようと心にちかった。

入選

見えない水への感謝

広島県 比治山女子中学校 二年 大村 風歌

水について、主に水道水についてですが、以前、とても考えさせられた出来事がありました。

去年の春、私の家のすぐ近くにある大きな道路の下を走る水道管が破裂して、アスファルトが大きくひび割れ、道路いっぱい冠水してしまふということがあったのです。

広島駅の新幹線口からすぐの大きなメイン道路です。その日はたまたま土曜日だったので交通量も多く、マツダスタジアムの試合に向かう歩行者もたくさんいたので、混雑しました。お昼のニュースで映像を見たところ近所の見慣れた道がひび割れて、水が大量に噴き出していました。これまで想像したことのない光景に驚き、私の頭の中も色々な考えが巡って混乱しました。

まず一番感じたのは、きれいな上水が大量に道路の上に流れ出しているのを見て、思った「もったいない！」という気持ちでした。家や学校で「水道水が無駄にせず大切に使うこと」といつも言われているからだと思います。せつかく浄水場できれいになった上水が、飲料水や生活用水として利用されないまま道路に流れてしまっているのは本当にもったいなく残念に思いました。

次に感じたのは、普段意識すらしておらず、ただのアスファルトとしか見えていなかった道の下に、そんなに大きな水道管が走っていたのだという驚き、知らないうちに街の中に上下水道は整備されていて、そこから我が家の蛇口にも水が届いていたのだという驚きでした。それは感謝にも近い思いでした。

ニュースを見て、色々な気づきと驚きがありました。しかし、後になつて一番驚いたのは復旧工事の早さでした。アスファルトを掘り返し、破裂した水道管を交換して埋め戻すまで、周辺に断水させることもなく、当日の夕方までに復旧したことに何よりも驚きました。復旧が終わって

すぐ母とその道路を見に行くと、水道局の方がたくさん工事に来られていたことが分かりました。普段接することのないこの方々のおかげで、家の蛇口をひねるだけでいつも安全なお水が簡単に飲めていたこと、見えない場所には上下水道が整備されていて、気がつかないうちに水の循環システムは一朝一夕に容易に造り上げられるものではないからこそ、きれいになった上水を、より大事に使わないといけないと、この時の道路の様子や工事に来られた方々を見て学びました。もちろんきれいな上水だけでなく、川や海などの水資源も同じくらい大切にしなければならぬと思います。

この時の帰り道、母に日本の上下水道は江戸時代にはもう発達していたと聞きました。なんて恵まれた国にうまれたのだろうと強く印象に残りました。

しかし、先人に残された環境に頼るばかりでなく、これからの世代にも現在の公共の水道設備や水資源を大切に保つていけるよう、私個人も、例えば上水を無駄使いたくないよう、下水に残し流さないよう、小さなことから気をつけていきたいと思えます。いつまでも家の蛇口からきれいでおいしいお水が飲みたいからです。

あの日以降、この工事にあった道路を渡る時、アスファルトが真新しくなった部分を見ては、あの日の水道管の復旧工事にとってもたくさんの方が関わっていたことを思い出します。そして、私の家に安心して安全なお水が供給されるまでの間にどれだけたくさんの方の手がかかっているのかを忘れないように毎日を通り過すと思っています。

入選

水の大切さ

徳島県 上勝町立上勝中学校 三年 野田 亜寿佳

私の住む町、上勝町は山あいにある小さな町だ。山の天気は変わりやすいというけれど、本当によく雨が降る。でもそのおかげで、一年を通して沢山の風景を見ることが出来る。

雨上がり、太陽に照らされた木々は雨粒を反射して、瑞々しさを増す。梅雨時の激しい雨。土砂災害の危険もあるけれど、山の木々の生育には欠かせない。雪化粧をした木々に反射した陽がきらめく冬の日。いきなりのひょうに驚きの声上がる休み時間。水が季節や天候の違いによって姿を変えながら循環し、私たちの生活に、ゆとりを与えてくれる。その中でも私が一番好きなのは、雨降りの朝の風景だ。水蒸気でもやがかった風景を見るのが一番好きだった。

平成二十八年十月二十八日、午前四時。この日を境に、私の生活は一変した。自宅が火事で全焼したのだ。自分の部屋から逃げ出した数分後、私の家は大きな火の海に包まれた。地元の消防団員の方々が消火活動をしてくださったのだが、いくら水をかけても火の勢いは増すばかりだった。必死の消火活動の末、出火から四時間後に火は消し止められた。変わり果てた我が家を前に、私たち家族は立ち尽くすばかりだった。

もつとたくさん水があったら、もつと早く鎮火できたのに。もつとたくさん水があったら、全焼せずにすんだのに。もつとたくさん水があったら……。

用水路の水が少なかったため、消火活動の途中で水が尽きてしまったのだ。そのため川から水を吸い上げるようになったのだが、それに時間がかかったという話を後から聞いた。私はこの瞬間、水の大切さを痛切に感じたのだ。

朝起きて飲む目覚めの水。夏の暑い日、からからに渴いたのどを潤してくれる水。一日の終わりに疲れを洗い流してくれる水。料理や洗濯といった生活用水だけではなく、お米や野菜を育てるためにも水は必要だ。

水は私たちの生活に欠かせないもので限りある大切な資源だということ。以前から知っていた。しかし、本当の意味では水を大切にできていなかったことにも気付いた。火事を経験したことで、水を大切にすることの意味が私の中で大きく変わったように思う。

石けんを手を洗う時や給食の牛乳パックを水洗いする時、水道から出す水の量を減らすようになった。シャワーを浴びる時間を短くし、出さず放しにしないように心がけるようになった。

それに、用水路やパイプの見回りも始めた。木や石が用水路をふさいでいないか、パイプに亀裂が入っていないか確認して歩くのが、最近の習慣だ。梅雨を迎えるので、今後はより注意していこうと思う。確認がてら、掃除をしたり、異変を感じた時には大人に知らせたりする。そういったことが自然とできるようになってきたのだ。火事以降に始めた節水や見回り活動は、ささいな活動かもしれない。しかしそれは、水を大切にしたいという私の思いの表れなのだ。

山火事や住宅火災が原因で、家や命を失ったというニュースを何度も見た。そのたびに、火事の辛く恐ろしい記憶が蘇ってくる。水を大事に使っていなかったことへの反省や後悔の気持ちも浮かぶ。また、命という一番大事なものを守ってくれたことへの感謝の気持ちも浮かぶ。私は水を通して水の大切さを知ることができた。これからも水に沢山のことを教わりながら、成長していきたいと思う。

焼け跡には新しい家を建築中だ。またあの大好きな景色を見られると思うと心が弾む。しかし、きつとその風景は前とは違って見えると思う。水への感謝や敬意を持って見る風景は、以前よりも輝いて見えると思うからだ。

入選

僕の決意

「0から始まる一滴」……。碑を見たとき僕は感動した。そして、決意した。

家族で出かけた、今年のゴールデンウィーク。源流モニュメントは、大河も一滴から始まるという意味を込めて、数字のゼロから一滴の水がまさに滴り落ちようとするデザインだった。この源流碑やモニュメントは、僕の家から約百kmも離れたところにある那賀町木頭北川の剣山スパー林道沿いに立てられている。

僕の住む町那賀川町の由来に繋がる一級河川「那賀川」は、流域の地形が急峻で全国でも屈指の急流河川である。また、台風が頻繁に襲来する全国有数の多雨地帯であることから、出水時流量が大きく、その反面降らなければ濁水が発生しやすいという特性をあわせ持っている。このため、洪水や濁水による被害が多発し、流域の工業生産や農産物に度々被害を与えている。そのような中、平成九年に、河川法が改正され、従来の河川事業の目的である「治水・利水」の上に「環境」が加えられるとともに、「河川整備計画」を策定するときに、流域住民の意見を反映することになった。

こういった背景から平成十四年三月、「那賀川流域フォーラム2030」が結成され、河川整備計画について原案を話し合い、取りまとめたものを河川管理者である国や県に答申した。住民が主体で取りまとめたというところに「自分たちの川を自分たちも守る責任がある」といった全国に類を見ない「住民も一緒になった」活動のすばらしさがあると僕は思う。事情に詳しい祖父の話聞いた。

祖父によると、答申後も河川整備の進捗状態の確認や流域の一体感の醸成といった活動を進めるため、「那賀川アフターフォーラム」を結成したとのことだ。そして流域の一体感を高める取り組みとして、数度の調査をして源流点を特化し、源流碑及び源流モニュメントを平成十七年に

徳島県 阿南市立那賀川中学校 一年 笠江 彰

建立したとのことだ。祖父は発足当初から事務局長を務め、今もずっと活動を続けている。

家族で訪ねた「源流モニュメント」。近くの「源流神社」では、さらに驚いたことがある。「この神社の鳥居は祖母と伯父が作り、鳥居に書かれた「源流」という文字は母が書いた。」鳥居の前で懐かしそうに見上げる母からそう教わった。瞬間、僕の身体に電流のようなものが走った。目の前にある「モニュメントや神社」。それは僕の家族を含めた沢山の人々の那賀川に対する想いが形になったものだ。ここから、「那賀川」が始まる。一滴のしずくが集まり、少しずつ流れとなり大河を創り出す。それはちょうどこの碑やモニュメントを作った人々の思いと同じだ。那賀川の流域にすむ一人ひとりが一滴のしずくだ。そのしずくが集まって、活動が活性化し「私たちの那賀川」を守る大きな流れを作っている、そう感じた。水を大切にしたいが流域の心を繋ぎ、こんなと湧き出る源流のように途絶えることなく、僕たち若い世代へと受け継いでいく、僕の胸の深いところでも何か温かい小さな火が灯ったような気がした。

「僕も何かの力になりたい」といった思いを伝えたいところ祖父から「那賀川源流コンサート」を紹介された。平成十八年から毎年十月に行われているこの活動の中に「ピアノ演奏ボランティア」がある。ピアノを弾くことが好きな僕は、今年のコンサートにボランティアとして参加したいと計画している。そして「那賀川や水を守る」活動を続けている方々に感謝の気持ちを込めてエールを送りたい。同時に「那賀川や水を大切にしたい」活動を次世代に確かに受け継いでいく僕の決意をピアノの演奏を通して伝えたいと思っている。

碑の前で覚えた感動と決意。僕は僕なりの歩みを今、しっかりと始めたい。

入選

今ある資源を守りたい

愛媛県 西条市立西条南中学校 二年 坪内 七海

「水」それは、私たちのそばに当たり前の様に存在し、一番身近な資源だ。それと同時に水は、何にも替え難い大切な資源でもある。

私の住む西条市には、「うちぬき」と呼ばれる、おいしくきれいで安全な水が沢山出てくる。西条には山や森、林が多くあるため大量の水を蓄え、循環することが出来る。そのため西条市では、水位が減少しても「水不足」にはならない。では、松山ではどうだろう。西条より山が少なく人口が多い。様々な建物が密集してダム造りようもない。実際に松山市も含む大都市では、水不足が多発していた。

小学校四年の時に節水活動を行った。節水活動といっても、「水は出しっぱなしにしない」や、「歯みがきはコップで」などに注意する程度の、ほんのささやかなものだった。正直、その頃の私は「西条には水が沢山あるんだから」と特に気に留めることは無かった。

しかし、先生に「水の都西条といえど、このままでは水がなくなるよ。」と言われ、驚きを隠せなかった。どういふ事かと疑問に思った私は、郷土資料を読み調べてみた。すると、次のようなことが分かった。

一つは、人口や住宅の増加に伴う自噴量の減少だ。近年、自噴するうちぬきのエリアは少しずつ縮小している。今も水位が下がり、自噴量が減少しつつあるのに直接的な対策はとられていない。

二つ目は、気候の変化による地下水の減少だ。少雨の長期化が続き、地下水が出なくなることがあった。そのため、川底を掘って水が地下に染み込みやすくなるという工事を行った。これにより、必要な水もいづつでも使えるようになった。私たちが当たり前に使っていた水は、当たり前前にわいてきた水ではなかった。私の知らない所で、水を守ってきた人たちがいたのだ。

この現状を知った私は、もつと水を上手く使い、不足しない方法を考えればいいのかと思った。

例えば、雨水を溜めて活用するのはどうだろう。山の多い地方では、山や森が吸収して自然の力で浄水してくれる。都会では地面を硬く分厚いアスファルトが覆い、雨水を再利用するのは困難だ。だが、雨水も大事な資源。空気中のちりやほこりを含んでいたとしても、それは降り始めだけ。三〇分も経つと、生活用水に使えるほどきれいな水になる。さらに煮沸させたり、ろ過をさせると飲料水までに生まれ変わるのだ。都会で地面に水が染み込まないのなら、屋根に降った雨水をタンクに導き溜めれば良い。こんな身近にある雨水も、利用しようと思えば私たちが助ける資源となる。逆に放っておけば、洪水をもたらす私たちに苦しみを与えるにだってなる。考え方、捉え方さえ変えることが出来れば、大切な資源を守るのもそう難しくはないのかもしれない。

まず私にできることは、やはり節水活動である。以前のようにただなんとなくやるのではなく、このままでは水が本当になくなってしまふこと、その水を守り続けている人がいることを真剣に捉えて、取り組んでいきたい。

今、当たり前前の様に寄り添う水。これから何世代後もその関係を壊さないよう、身近な資源を守ることに努めたい。

入選

「筑後川」から地球の未来へ

福岡県

福岡教育大学附属久留米中学校

三年

下川

楓翔

「わあーっ、大きな川だな。」

私の住んでいる福岡県久留米市には「筑後川」が流れている。熊本県、大分県、福岡県そして佐賀県にまたがって流れている九州最大の川だ。

この「筑後川」は、昔から私たちの生活を様々な面から支えてくれた。それゆえ“水”は、私が生まれた時すでに存在しており、蛇口をひねれば出てくるこの“水”について特に気をつけたこともなかった。

私の通っている中学校では、毎年三年生が「混声合唱組曲 筑後川」という五部から構成された曲を歌い継いできている。新三年生が一年生への歓迎の気持ちを込めて入学式で曲を贈るため、二月頃から練習が始まった。この第一部の曲「みなかみ」を歌うにあたっては、最後第五部の曲「河口」の姿を思い描くことが大切だ。しかし、なかなかイメージできず、練習にも息詰まってしまう。

そこで私は、ふと、実際に「筑後川」を見に行ってみようと思いついた。そこでは野風に乗り、一面黄色い絨毯を敷いたようにゆらゆらと揺れる堤防の菜の花。春の陽光を浴びてキラキラと輝きながら流れる雄大な川が私を迎えてくれた。「みなかみ」からの長い旅行を終え、堂々と「河口」に向かって流れていく、自信に満ちあふれた姿に胸を打たれた。自分の存在がちっぽけに思えた。阿蘇に降り注いだ雨が徐々に川となり、九州の四つの県を経由して、私の住む久留米の美しい景色を造っていた。私は、当たり前だと思っていた“水”のありがたみを痛感した。

川の“水”は、私たちに美しい景色を与え、生活の源として私たちを支えてくれている。私たちは“水”があるから生きることができ、自然が生みだす感動を感じることができる。だからこそ、私たち人間は“水”を大切にし、人と自然が共存する努力をしていかねばならない。

私の住んでいる久留米市では、筑後川の清流を求めて、様々な水質保全の取り組みが行われている。例えば、街頭で水質保全PRをしたり、

河川をきれいにするため「ノーポイ」運動と称して筑後川堤防のゴミ拾いを行ったりしている。今はまだ取り組みの頻度が少ないが、川がきれいな状態を保つためには、もつとこの取り組みの認知度を上げ、行う回数や参加人数を増やしていくべきだ。

その他、地域が行っている活動以外にも、学校で授業の一環として取り組んでいる。実際に私は小学校で、筑後川の今の現状を調べ、私たち住民がどうしていくべきか模造紙にまとめて発表したり、人がゴミをポイ捨てしないように、デザインや文字を工夫してわかりやすいポスターを作ったりした。また中学校では、人と自然が共存できるようにお互いにメリットがある取り組みを考えると、WIN・WINプロジェクトを行った。

学校での学びを通して、わが家では“節水”への取り組みを考え、どんな場面で何をするのか具体的に決めて実行した。例えば、お皿を洗うときに汚れが落ちやすいように米のとき汁を使ったり、少ない水量できれいに洗えるように油污れをふきとってから洗ったりして節水を行っている。一人の力は小さいが、その小さな力がたくさん集まれば大きな力になる。今はまだ家族の中でしか実行できていないが、これから親戚や友達にも“節水”の取り組みを広げていきたい。

私は、「筑後川」が河口から海へ向かい地球を満たすイメージでこれらの合唱練習に取り組んでいく。後世に水で満たされた青い地球を引き継いでいくために“水”を大切にしている取り組みを継続していきたい。

入選

水が育む島の命

沖繩県 石垣市立石垣中学校 三年 田淵 鈴夏

小学校三年から中学三年の今まで七年間やっている干潟を覆う水の研究。薄く水に浸されたたったこれだけの地域だが、この小さな地域は生物多様性を育む、石垣島の非常に貴重な財産となっている。干潟は山から下りてきた水を浄化して海へ還す役割をしているが、それ以外にも命のゆりかごという役割を担っている。石垣島という小さい島の、それもたったこれだけの面積の中に絶滅危惧種に指定される生物が数多く生息していることは奇跡にも近いといえるだろう。淡水と海水が入れ替わるこの地域を浸す水は、普段何気なく眺めている分にはわからないが、私たちが想像する以上に大きな力を持っていることにはならないだろうか。

この小さな干潟に六種類生息するマングローブ林も、根っこをむきだしにされながら自分の体に必要な水分をたくわえながら生息している。夏の暑い地に深く四方にしっかりと根を広げて、少しずつ少しずつ水が地に満たされてくるのを待っているのだ。そして意外にも感じるが、渡り鳥たちもこの干潟へやってくる。石垣島の山の栄養分を含んだ水で育まれた多くの生物をえさに求めて長い旅路の休息場として飛来してくる。渡り鳥が飛来してくる時期は、めったにお目にかかれぬ絶滅危惧種の鳥も観察することができ、この干潟が浸す水が多くの生物多様性をつくり出していることがわかる。しかし、この国内稀に見る生物多様性を誇るこの地域も、水の変化でそこに存在する環境も大きく変化が伴っていると感じている。「水が変わる」ということは生態系にも少なからず変化をおよぼしているのではないかと考えた。そして、私は二年前に大きな出会いがあったことを思い出した。

干潟の水の研究を始めて、どうしても話を聞きたくて東京にある、日本科学未来館の科学コミュニケーターの方を訪ねたことがあった。私が訪ねることはあらかじめ連絡を取って伝えてあったので、科学コミュニケーターの方もその方面に詳しい大学の先生から資料を取り寄せてくれ

ていたり、動画をみせてくれたり、「環境」を物理科学の世界で表現して見せてくれた。そこで熊本大学の先生の研究室や理研の研究者の方たちともつながることができ、土の中に電気を生み出す微生物の存在を知ることができた。

「この微生物の力を利用して干潟の水の健全度を測ることはできないのだろうか」

「もしそれが可能ならば大きな動力を必要とせずとも水環境を守り、しいてはそこに生息する多種多様な生物たちの生活を守ることにつながるのだろうか」

干潟にこの生物を生息させ、放電される電気量を定期的に計測することで、その微生物の活動量も調べられる。水が守られていれば微生物の活動量も増えるだろう。活動量が増えているということは水がきれいだということにつながる。活動量が増えるだろうか。水の循環で様々な生物が育まれる干潟は、まさに「奇跡の生物多様性」だ。考えがどんどん膨らむにつれ、命を育むための水環境に寄せる思いがあふれてきた。私たちの暮らしには水が欠かせない。生きていくために水は必要不可欠だ。同じように、地球上に存在する多くの種もまた水を必要としていることを忘れてはならないと思う。美しく清らかな水環境が守られていくために、私は今後も少しずつ研究を継続していきたい。今、私が考えていることは、まだまだ微力で足りないところがたくさんあると思う。しかし、自分のやっていることは必ず自分たちの暮らし環境に役立ち、今ある暮らし以上に豊かな生活を生み出すことができると信じている。私達若い世代が意見やアイデアを寄せ合い、それが現実になっていく、そんな日も遠くはないと思う。

入選

水を守り、伝える

沖縄県 多良間村立多良間中学校 三年 佐和田 愛羽

「ユノーレガユノーレガヒヤツカヤツカ」この歌声が島中に響き渡る日。「スツウプナカ」の行事は最高潮を迎える。「スツウプナカ」は、まず自然井戸に供物を捧げてから始まる。多良間島は「水」との関わりがとても深い島であることをこの行事を通して知ることができる。昔の人たちは、水の大切さやありがたさをいやというほど実感していたから、この行事が生まれ、引き継がれてきたのだ。

私の住んでいる多良間島では一九七一年に一八五日間におよぶ大干ばつがあった。そのため、生活が苦しくなり、島外へ移住していった人もいると聞いている。昔も今も干ばつや台風などの自然災害を完全に防ぐことはできないと思うが、災害に備えて水を蓄えておくなど、できることは何かあるはずだ。また、見つけ出していく努力をしていかなければならない。

私の住んでいる多良間島は、山も川もなく、平べったい小さな島なので、生活で使う水を得るために、たくさん苦勞があったそうだ。生活で使う水はすべて井戸から汲んでまかっていたという。一日に何十回も井戸に通ったとのことだ。島のお年寄りの誰に聞いても「大変だったよ」と話してくれる。水を得るだけですごい苦勞をしてきた私たちの祖先は、その苦勞を「水への感謝」の形にして残してきた。自然井戸も島の文化財として大切に保存されている。

今でも、私たちの島では、雨水を貯水して洗濯や入浴用として使っている家庭がある。便利な水道水だけではない、貴重な水資源の利活用だと思う。島で生きていくには、水が限りある資源だということを理解し、水を有効的に使い、「水」を守るための知恵を島民は求め続けてきた。先代を生きた人々が水利用の生活を現代のような形で残してくれたのだ。時をかけて多くの人の苦勞を結び合わせて、今のような水道水の生活が整えられている。このような苦勞が重ねられた「水」利用の生活の中で、

知恵が生み出され、技術も進歩し、現代の便利な生活に変わってきている。

しかし、蛇口をひねれば当たり前のように水が出てきて、安全な水を簡単に得ることができ、安心して自由に使うことができる恵まれた環境で暮らしている私たちは、水の大切さやありがたさを忘れてはいないだろうか。私もそれが「当たり前」だと思っていた。しかし、今は、決して「当たり前」のことではないことが分かってきた。

水事情は、世界の国々によっても異なり、沖縄の島々においても違っている。水が原因で病気になったりもする。水が汚染されるということは人間がしっかりと管理できていないからだと思う。洪水や海水汚染なども人間の森林伐採によって起きる場合もある。「水」が汚染されると、私たちの生存が脅かされる。安全な水が確保できる環境は、人間にとっても一番良い環境となるはずだ。

「宇宙のオアシス」「水の惑星」「水の地球」。地球は私たち人間が生存を託している宇宙のオアシスだと言われている。そのかけがえのない地球で、「水」とつながりながら生きている私たちは水に対する「学び」をおろそかにしてはいけない。安全な水を守るために、そして確保していくために、私たちの小さな努力の積み重ねを怠ってはいけない。

私の生まれ育った多良間島には、「水」を天からの恵みとして尊く扱い、島の人たちが力を合わせて大切に守り続けた伝統がある。

私は、その歴史を知ることでも水の大切さ、尊さに気づくことができた。それは、私にとつて、とても大きな一歩だ。水を無駄に使っていたこれまでの私とは違う。多くの人に伝えていきたい。そうして水を大切にしてくれる人が増えていけば、私の一歩も「水」を守ってきた先人たちの思いに近づいていける。

入選

水と電力

アメリカ合衆国

ワシントン日本語学校

二年

カルボスキ

慶

古代ギリシャの哲学者タレスは言った。万物のアルケーは水だと。アルケーとは、根源的原理を指す哲学术語である。言わば、全ての物の根源は水であると言うことだ。私は彼の意見に賛成する。水とは、水素原子二つと酸素原子一つによって構成されているいたって単純な化合物であると同時に、水は我々人間の体の約六割を占めており、私たちにとって最もありふれた液体である。人間以上に、水は全生物が生命を維持するために必要不可欠である。科学においても、流体力学、気象学、生物学など、水に関係する科学分野は数え切ることができない。そして、私達人間は、水をただの飲み物としてだけでなく、活用していくべきだと、私は考えている。それは、水を使った電力の発電である。

私たちが今生活に必要なものと言えれば何を思い浮かべるだろうか。住宅、お金と、いろいろあるかもしれないが、やはり電気が必要不可欠ではないかと思う。照明、洗濯機、携帯電話など、様々な電化製品や電子機器を使用するには、やはり電気が必要である。この電気を発電する方法には種類が沢山あるが、水が一番関係している方法といえば水力発電だろう。水力発電とは、水力で発電機を動かして電力を生む発電方法である。最も一般的なのがダム式で、その名の通りダムを建設し、ダムによって生まれる高低差を利用して水を流す方法である。この発電方法は、火力発電などとは違い、大気汚染ガスなどの有害な副産物は発生せず、水のみを使用しているので再生可能エネルギーとされている。だが、水力発電はデメリットがないと言う訳でもない。例えば、ダムの建設には広大な土地の面積が必要であることや、ダム建設地に存在する川などの生態系の破壊、水質の汚染などがある。また、発電効率も低く、二〇一四年時点では水力発電による電力の発電量は、天然ガスや石炭、石油を含めた火力発電の発電量の約一割にしかなかった。水力発電は、他の発電方法に比べ劣ってしまう点が多い。

ならば、全く違う風に水を使つてはいいのではないだろうか。水の流れる力を使うのではなく、水の中にひめられた化学エネルギーを利用するのはどうだろうか。それは、水を使つた電池による発電方法である。電池の電力を産み出すメカニズムは、簡単に言えば負極から正極へ電子が流すことにある。この際重要になってくるのが電解液という両極を中和する液体である。普通の電池ならば、負極と正極には鉄を使用するが、海水電池は少し違う。負極にはマグネシウムという金属を使い、正極にはなんと、空気中の酸素を使用するのだ。そして、電解液には食塩水、もしくは海水が使用される。この発電方法はまだ研究の最中であるが、考えてみると、これはかなり画期的な発電方法であるのではないだろうか。必要な素材は、少量のマグネシウムと、この地球上にほぼ無限に存在する海水、そして私たちの吸っている空気中にある酸素だけである。しかも、副産物で自然環境に有害な物質は発生しない。もしもこのような発電方法が実現したとすれば、費用は最低限におさえつつ自然環境への影響も抑え、また、真の再生可能エネルギーを実現することができる。今、この地球は、火力発電などによって発生する有害な空気汚染ガスにより、様々な環境問題が起こっている。このままでは、私たちの生活に支障が起こりかねない。やはり、火力発電に代わる害のない発電方法を一刻でも早く開発しなければならぬ。そして、私たちにとって最も身近な水が、新しい発電方法を見出す鍵になるのである。私たちは今後、身近なものをいかに活用するかが、私は大切だと思っている。

第39回全日本中学生

水の作文 コンクール

水について考えよう



皆さんは、「身近なもの」に何を思い浮かべるでしょうか？ 家族、学校、先生、人それぞれ思い浮かべるものは違うと思います。しかし、全ての人々にとって、本当に身近でなくてはならないもの、それが「水」です。

水は、海から蒸発し、雨となって地上に降り、川を流れ、地下にしみこみ、また蒸発して永遠の循環を繰り返しています。その中で私たちは、飲み水、トイレ、料理、農地に工場、プールやレジャーと、本当に様々な場面で水の恩恵を受けています。時には、水害が起きたり、水不足になって困ることもあります。それらを未然に防ぐための施設や、安心して飲める水を送り届けるための施設で働く多くの人もいます。

しかし実際、皆さんは水について何を知っていますでしょうか？ あまりに身近にあるものは、実は知らないことがたくさんあるものです。

この機会に、皆さんが暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、両親、先生から学び聞いた話、自分で調べたことなどをもとに、水についての考えや今後の水の使い方についてまとめてみましょう！

表彰(予定)

- 内閣総理大臣賞(最優秀賞)1名
- 厚生労働大臣賞(優秀賞)1名
- 農林水産大臣賞(優秀賞)1名
- 経済産業大臣賞(優秀賞)1名
- 国土交通大臣賞(優秀賞)1名
- 環境大臣賞(優秀賞)1名
- 水の週間実行委員会会長賞(優秀賞)1名
- (独)水資源機構理事長賞(優秀賞)1名
- 全日本中学校長会会長賞(優秀賞)1名
- 全日本中学生水の作文コンクール
中央審査会特別賞(優秀賞)(必要に応じて)1名
- 入選 約30名
- 佳作 約100名

最優秀賞及び優秀賞の受賞者8月上旬に国土交通省に招待し、賞状等を授与します。

メインテーマ

水について考える
(個別の題名は自由)

原稿(記載要領)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記

応募締切日

[国内] 各都道府県の水資源担当部局にお問い合わせ下さい
[海外] 平成29年5月12日(金)

入賞発表

平成29年7月中旬

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県 【後援】文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

提出先(問い合わせ先)

国内 各都道府県の水資源担当部局 海外 国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源政策課 〒100-8918 東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号 ☎03-5253-8386(直通)



写真：第31回水とふれあいフォトコンテスト(平成28年度)入賞作品

8月1日は「水の日」、8月1日～7日は「水の週間」です。

水の日

検索

※詳しくは、「水の日」「水の週間」についての国土交通省ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>)をご覧ください。

第39回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（平成29年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ年齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・平成29年6月2日（金）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
 - ⑥ 版權等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査 応募作品16,725編のうち、各都道府県の地方審査を経た180編及び海外日本人学校より送付された41編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる39編を選出。平成29年7月7日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞8編及び入選30編あわせて39編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	水の週間実行委員会会長賞	
	独立行政法人水資源機構理事長賞	
	全日本中学校長会会長賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成29年8月1日（火）にイノホールにて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

- 枝村 晶子 (全日本中学校長会編集部部長)
- 小川 祥直 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (経済産業省地域産業基盤整備課長)
- 工藤 啓 (独立行政法人水資源機構理事)
- 塩屋 俊一 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (農林水産省水資源課長)
- 須磨 佳津江 (フリーアナウンサー)
- 玉野井 晃 (公益社団法人日本水道協会調査部長)
- 長崎 宏子 (スポーツコンサルタント)
- 宮崎 正信 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (厚生労働省水道課長)
- 山本 景一 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (国土交通省大臣官房参事官)
- 渡邊 康正 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (環境省水環境課長)

5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
 後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

第39回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	◎池亀 廉	たけした みゆう 竹下 心結	わたなべ ようた 渡邊 陽太	—	—
2	青森県	○佐藤 実真瑠	きむら ちさよ 木村 央怜	○おかだ かずな 岡田 香那美	いしだ ひば 石谷 檜葉	なかつる みずほ 中鶴間 瑞歩
3	岩手県	○梅村 ことね 梅村 琴音	おの でら かい 小野寺 海斗	さとう ともか 佐藤 友香	しもかみ まさ 山下 真咲	ていおの のぞみ 照井 希望
4	宮城県	あきもと ゆうな 秋元 優那	○あべ ひな 阿部 陽菜	○ふくはら しの乃 福原 史乃	たかはし ひい 高橋 佳	いぎき あやの 井崎 英乃
5	秋田県	—	—	—	—	—
6	山形県	—	—	—	—	—
7	福島県	うめつ はると 梅津 温大	おの みお 小野 妙音	こさか はやと 小坂 隼人	さとう ありす 佐藤 有珠	まつだいら ゆうき 松平 優希
8	茨城県	○すぎやま さい 杉山 咲衣	くぼ た ゆりこ 久保田 百合子	わたなべ ともき 渡辺 智紀	みやち ひょうた 宮地 亮汰	みやち ゆうと 山口 悠翔
9	栃木県	○たかはし まりん 高橋 茉鈴	あべ こうすけ 阿部 康佑	ほし あゆみ 星 愛優香	おさき さくら 尾崎 さくら	○ほし ゆりか 星 優莉香
10	群馬県	○たかい ともひろ 高井 智大	ひらやま かすみ 平原 果澄	かない あやか 金井 彩花	まさき たくみ 正来 たくみ	ひろた なお央 廣田 奈央
11	埼玉県	◎あおき けいせい 青木 奎晟	まつもと こたあ まつもと 胡々杏	やまがし あいか 山崎 愛佳	おおくま めぐみ 大隈 愛珠	おあた ありさ 太田 あり咲
12	千葉県	○しらい あき 櫻井 暁	◎おだ ゆうみ おだ 優海	すぎの れん すぎの 舜	かじお けんた 梶尾 健太	まつもと りあ 松本 りあ
13	東京都	うすい あいり 薄井 愛璃	○おおむら きゆうら 大村 暁由良	たにもと かなな 谷本 菜南	いのうえ ほのか 井上 ほのか	おくら はるの 小倉 晴乃
14	神奈川県	○かほたに かほ帆 酒谷 香帆	おおつか さくら 大塚 さくら	うえだ まい 上田 舞衣	やぐち ゆり 谷口 友理	○いたばし ありか 板橋 ありか
15	新潟県	たかし まい 高嶋 泰地	みずさき ゆい 水澤 友唯	みのう まさむね 美納 正宗	うの 志 宇野 志	はやし りりこ 林 莉々子
16	富山県	よしだ しゅうや 吉田 翔哉	じょうぞう あきほ 常案 瑛歩	どうかい 美咲 道海 美咲	—	—
17	石川県	○よしき 萌流 吉崎 萌流	—	—	—	—
18	福井県	さいとう なるか 齋藤 なる香	まつばら みずほ 松原 瑞歩	よねむら れいな 米村 怜菜	いまだ ゆいこ 今田 ゆいこ	みずの こはる 水野 こはる
19	山梨県	—	—	—	—	—
20	長野県	—	—	—	—	—
21	岐阜県	○ねざき まゆ 根崎 真由	ながはら あみ 永原 愛海	あらお りょうた 荒尾 凌太	いたづ なぎさ 板津 渚	はらだ まさあき 原田 公彰
22	静岡県	いづみ はやて 飯塚 颯	○つちやま こころ 土屋 こころ	くぼ た りな 久保田 莉菜	ないとう ゆいこ 内藤 麻優子	せりぞう あい香 芹澤 愛香
23	愛知県	○なかの なつみ 中尾 捺美	いわた あやみ 岩田 彩美	かわはらゆき 川原崎 由依	にしし 愛子 小西 愛子	○すずき かいと 鈴木 海斗
24	三重県	かほら あやか 久野 綾香	みはら さくら 三原 さくら	かめや ともる 亀谷 終瑠	ままだ 前田 前田 あずみ	りゅうたろう 丸尾 遼太郎
25	滋賀県	◎しんやま ずは 陣山 涼葉	きんつじ まなみ 真奈美	もりた みさき 守田 美沙樹	—	—
26	京都府	○いのうえ まい 井上 舞	はやし みちこ 林 路子	◎かわい のり乃 河合 のり乃	まきの あい 牧野 葵	—
27	大阪府	もり だいき 森 大樹	○おじやま さゆり 藤山 さゆり	○やの ななみ 矢野 七海	なかい ゆうひ 仲井 雄飛	た りん 田 鈴
28	兵庫県	やまぐち きき 山口 早紀	たかた まお 高田 真緒	おしかわ 穂花 吉川 穂花	あもう ゆづき 天羽 悠月	あかうた のぞみ 赤浦 希海
29	奈良県	ほり あんな 堀 杏菜	いまもと 暖乃 今本 暖乃	ほりのうち なな 堀之内 菜七	うえだ なお央 植田 奈央	きたむら ゆう 北村 悠
30	和歌山県	いもと 彩音 井本 彩音	うしかわ りん 内川 璃乃	しばた けい 柴田 啓介	—	—
31	鳥取県	—	—	—	—	—
32	島根県	まつい ゆう 松井 悠	○いしくら かなめ 石倉 要	—	—	—
33	岡山県	いしだ さくら 石田 さくら	やぎ 蒼葉 八木 蒼葉	たなか あやの 田中 彩乃	◎いまだ ちほ 稲田 知陽	やました ちほ 山下 千穂
34	広島県	○みやま かずま 三好 司真	○おむら ふうか 大村 風歌	いしやま かり いしやま 明香里	—	—
35	山口県	ひろ そらと 弘 空青	しもおか りこ 下岡 莉子	ほしだ はる帆 星田 陽帆	—	—
36	徳島県	○のた あすか 野田 亜寿佳	○かきもと 彰 笠江 彰	はしもと 幸奈 橋本 幸奈	いしやま みこ 石山 美心	たかい ひろが 高井 彪朗
37	香川県	◎いしづか りゅうのすけ 河津 龍之丞	かわむら ひかる 河村 ひかる	—	—	—
38	愛媛県	いしづか もも 石津 百萌	○つぼうち ななみ 坪内 七海	もりざね みゆ 森實 美羽	たかはし まい 高橋 真衣	かわにし のぞみ 川西 希実
39	高知県	—	—	—	—	—
40	福岡県	○しながわ ふう 下川 楓翔	かさい あみ 笠井 杏美	みや原 さやか 宮原 さやか	かく ちやん 郭 薔	こじま ゆう菜 児嶋 悠菜
41	佐賀県	すえなが あやの 末永 彩乃	はしぐち 幸奈 橋口 幸奈	たにくち あいか 谷口 愛佳	きづか みさき 木塚 実咲	いまいずみ 今泉 すずか
42	長崎県	しげや たしん 渋谷 泰心	もりなが まな 森永 真菜	ほり 菜々美 堀 菜々美	ひらかわ き絵 平川 き絵	おがわ りな 小川 莉奈
43	熊本県	しもかわ ことみ 下川 紀美	もり けい 森 優佳	よしもと さとし 吉本 諭司	○おかくべ りほ 岡部 利穂	なかむら ゆうき 中村 優希
44	大分県	しげのう 海 首藤 海	ほしの りんか 星野 倫花	か 甲斐 遥 甲斐 遥	—	—
45	宮崎県	ひだか こうけん 日高 恒顕	なかむら そうご 中村 颯牙	なかた けんたろう 中田 健太郎	おのおの 俊太郎 大野 俊太郎	まくち ちな 菊池 智菜
46	鹿児島県	◎たなか けい 田中 恵仁	やまだ 世花 山田 世花	みやま 慈恩 宮里 慈恩	こみやま りお 児美川 莉生	うちやま みく 内山 美空
47	沖縄県	○たぶら ずか 田淵 鈴夏	○さわ だ まなほ 佐和田 愛羽	みやがわ そら みやがわ 天	こやま あまね 小山 天音	したじ くら 下地 久良
48	海外	○カルボスキー けい カルボスキー 慶	—	—	—	—

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第39回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	3	11	89	38	19	32
青森県	5	4	311	73	70	168
岩手県	5	4	15	0	9	6
宮城県	5	10	41	2	8	31
秋田県	0	0	0	0	0	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	5	18	650	48	347	255
茨城県	5	7	484	133	255	96
栃木県	5	4	282	89	84	109
群馬県	5	7	510	117	216	177
埼玉県	5	8	206	57	105	44
千葉県	5	12	627	124	212	291
東京都	5	9	428	150	150	128
神奈川県	5	13	1,340	352	598	390
新潟県	5	4	30	6	14	10
富山県	3	5	386	109	195	82
石川県	1	1	1	0	0	1
福井県	5	3	34	0	12	22
山梨県	0	0	0	0	0	0
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	5	232	6	46	180
静岡県	5	4	204	88	57	59
愛知県	5	6	128	48	44	36
三重県	5	5	600	231	306	63
滋賀県	3	5	445	160	209	76
京都府	4	10	992	150	521	321
大阪府	5	5	486	238	133	115
兵庫県	5	3	435	106	225	104
奈良県	5	6	170	34	41	95
和歌山県	3	15	1,088	547	321	220
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	2	2	2	1	0	1
岡山県	5	3	7	0	7	0
広島県	3	7	841	317	341	183
山口県	3	4	29	4	13	12
徳島県	5	4	23	3	0	20
香川県	2	17	78	44	34	0
愛媛県	5	24	540	135	217	188
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	5	14	1,243	2	693	548
佐賀県	5	24	435	208	227	0
長崎県	5	4	235	49	100	86
熊本県	5	22	2,292	727	796	769
大分県	3	3	93	31	32	30
宮崎県	5	10	152	94	32	26
鹿児島県	5	9	421	184	177	60
沖縄県	5	24	79	13	20	46
海外	-	2	41	17	24	0
合計	180	357	16,725	4,735	6,910	5,080

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
合計		17,858	503,186			173,910	179,569	149,504

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名、
 第37回においては学年未記入者6名を学年別集計から除いている。

第39回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品16,725編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞8編の受賞者の表彰式は、平成29年8月1日（火）に東京都千代田区のイイノホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



最優秀作文の朗読
熊本県 熊本信愛女学院中学校1年 岡部 利穂さん（内閣総理大臣賞受賞者）



作文コンクール受賞者と各賞授与者



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>